
普通の現代人が幻想入り

さっきゅん@瀟洒なメイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通の現代人が幻想入り

【Nコード】

N8802X

【作者名】

さつきゅん@瀟洒なメイド

【あらすじ】

普通の現代人、霧雨悶助は霧雨魔理沙と言う妹を無くし（幻想入りのせいで）、両親も離婚し、母にも捨てられた。施設に預けられ、平凡に生活していた彼の日常は、やがて妹と同じ世界へ行きそして生活を送ることとなる…

これからの展開でハーレムあります。
主人公強設定です。

以上の二つが嫌な方は閲覧をご遠慮下さい。

1話「記憶」（前書き）

オリキャラが含まれてます。これからの展開でハーレムとかもあるかもしれない。

主人公強設定。人間を軽く超えたレベルですね。人間だけれども人間卒業。

上記の設定が嫌いな方は、閲覧をご遠慮下さい。

1話「記憶」

P M 2 2 : 4 5

2008年12月17日。

特別な日でも無く、夜の岡谷市を歩いていた。

俺の名前は、霧雨悶助。名前？ああ、作者のネーミングセンスが無いから仕方ない。

住んでるとこは長野県岡谷市にある施設。

俺には妹が居た。

霧雨なんだっけ…下の名前は忘れてしまった。

妹は、ある晴れた朝に遠足のバッグを残して姿を消した。

親は警察に連絡して妹を探して貰ったのだが…

日本中のどこを探しても見つからず、妹は死亡したとされたのだ。

それ以来、両親は変わった。

父と母は毎日のように喧嘩し、俺は怯えながらも幼少期を過ごしたものだ。

結果、俺が7歳の時に両親は離婚。

母に引き取られたが、すぐ捨てられて1ヶ月公園で過ごした。

まあ、公園での生活は食べ物以外では苦勞しなかったからな。
其処までって訳でもなかったし。

警官に見つかって施設に預けられた時は嬉しかった。
そりゃ、飯付きで寢床があるんだから、公園より10倍はマシであ
ろう。

それに、施設にはPCがあった。

「暇潰しにでもなれば」と一台購入して共用で使ってるらしい。

共用は共用なのだが使う人は俺とごく少数の人だけだ。

最新のWindows7なのに、何でもんな使わないんだろう（、・
・、）？

PM23:31

しばらく岡谷市内を歩き、施設へと戻る。

「お帰り。気持ち良かった？夜の岡谷は」

施設で知り合った緑髪の少女。名前は…ハルカって言うんだっけ。

まるで妻のように出迎えられるので毎度困っている。

「気持ち良かったけど、出迎えはしなくていいよf^_^」
「むうー、何だよ？」

「それは…その。何だ」

と、質問の答えに困っている…

「はいはい、その二人。みんな寝てるんだから、早く寝なさい」

俺達に注意を促したのは、ここの管理人を勤める女性である。
要は一番ここで偉い人って訳だ。

「今日は管理人さんが来たから仕方無いけど、明日は…ふふふ」

不敵な笑みを浮かべるハルカ。
なにこの子こわい（、、）

「お、おやすみ…」

「おやすみっ！」

…明日が不安だ。

AM0:06

俺は、新作の東方神霊廟をプレイしようと試みた。

一時間後…

「よし、6面… 神霊廟Normalは比較的簡単だな。easy
モード（笑）なんて言わせない」

「男ならLunaticだぜ」

…ん？誰かの声がしたような気がする。気のせいかな…

「あつ、いつの間にかコンティニュー画面に…仕方ない、やり直そう」

そして、誰かの声がしてから不思議な現象が起きる。

…神霊廟の自機選択が「霧雨魔理沙」しか選べなくなったのだ。

「ちょw 霊夢さん選べないw」

仕方なくこの魔理沙と言うキャラを使う。

しかし、不思議な現象はこれだけに止まらなかった。

…今度は、Lunaticしか選べなくなっていた。

「神主さん、助けてお（、・・・）」

どんどん笑えなくなつて来る。
プレイする気も失せて、現在時刻を確認するために時計を見る。

「お、もう深夜2時か…寝ないとやばいな。まあ明日何も無いからいいけど」

PCの電源を落とし、布団に被る。

ただ、神霊廟をプレイしてた時の不思議な現象は、何か起こる予兆なのでは…と不安を感じた。

だが、不安な気持ちになつていゝるよりは他のことを考える方がマシだ。と言つ結論に至つた。

悶助「霧雨…魔理沙。何か、うちの妹と似てるんだよなあ。」

幼き頃の自分と、妹が遊んでる姿を照らし合わせる。

鬼ごっこをしている。

とびっきりの笑顔で妹が俺を追いかける。

親はニコニコしながら俺達を見ている。

この時は、俺は2歳で妹は1歳か。

幸せだったなあ…

…

所は幻想郷。博麗神社では何やら話がされていた。

「へえ、霧雨悶助…ね。魔理沙の兄でただの人間、か。まあいいわ。面白そうだし、魔理沙も再会ってことで…」（チラッ）」

幻想郷の大賢者、八雲紫は彼を幻想入りさせる気満々だ。

まあ、妖怪に喰われたとしても責任は取らないが。

「…私は別に構わないわよ。でも、魔理沙と血縁関係だからなあ…」

博麗の巫女、博麗霊夢は血縁関係と言うことに不安を感じているようだ。

「血縁関係でも、性格は違うと思うわよ？流石に」

「そうよね…そう信じるわ」

そもそも、何故幻想入りすることになったかと言うと、紫の盗み聞

きから始まったことだった。

神社での霊夢と魔理沙の会話にて、「お兄さんとか居るの?」と聞く霊夢に、魔理沙が居るぜ、と言った後自分の兄について熱心に語り出したのだ。

たまたま見えない所で聞いていた紫が興味を持って…となって、今に至る。

「それじゃ、行って来るわ」

紫は、早速行動に移した。

1話「記憶」(後書き)

初投稿です

2話「異世界」

朝9時。

その日は、生憎の雨でとても外に出られる状況ではなかった。

悶助「ん…？ アラムなんて設定してなかった筈だが」

「おはよう」

「うん？おはよう…って え！？」

悶助が驚くのも無理なかった。

何故なら幻想郷の大賢者・八雲紫が目の前に居るからだ。

「霧雨悶助くんだったかしら？」

紫は、妖艶な色気で此方に近づいて来る。

「あ、はい。でも、何で八雲紫さんが居るんですか？」

名前を聞いた瞬間、ピクッと反応する紫さん。

刺激しちゃったかな（´・・・`）

「…あなた、私の名前を知ってるのね？」

「この世界では幻想郷は二次元ですから、情報が入手出来るんですよ」

「それなら理になってるわね。それで、本題なのだけね。
あなたを、幻想郷を連れて行きましょう」

…は？幻想郷？

俺は頭の中が真っ白になった。

二次元に行くことなんて出来るのか？

「……………」

「何も言い残すことはないのね。なら、話は早い」

紫は悶助を幻想郷へ連れて行くのであった。

P M 1 5 : 0 5

悶助は、深い森の中に落とされた。

「あいたた… ここはどこだ？というか紫さん？…」

紫の姿は無く、あるのは森だけだ。

「まさか… 魔法の森！？ そしたら、神社目指さないとなまずいな…」

まずいと言うのは、妖怪がいつ襲って来るか分からないからである。妖怪に遭ったら命は無い。

「服とかは変わってないみたいだな。良かった良かった」

P M 1 5 : 5 8

おいおい、本当に神社なんてあるのか？

歩いても歩いても、ゴールが見えない。俺はどこへ向かってるのだろうか？妖怪の恐怖に少々怯えながらも、彼は歩いた。

「あの鳥居と石段… 博麗神社か？」

悶助は左上の方向に博麗神社があるのを確認すると、全力で走り出した。

「これは襲われる前に行くしかない！ チェストオオオオ！！」

「今日も快晴ね… あの紫の言ってた奴、もう幻想入りしたかしら？」

霊夢はお茶を啜りながら、淡々と言う。

「…まあいいわ。暇だし寝ようかなー」

10分後。

博麗神社の前に着いた。やっと、ここまで来た…

道中、犬のような妖怪に出会った。

何とか逃げてきて服の部分部分をちぎられただけで済んだが…。

「石段が意外とあるな…　ざっと120段はある」

石段を登る気力もほぼ残って無いが、力を振り絞って登り続けた。

P M 1 6 : 4 4

神社の鳥居に着き、辺りを見回すと人の姿は無かった。

出掛けてるのかな、と思いながらもここで生きていけるように、お祈りすることにした。

チャリーン

200円を入れた。

俺もあまりお金には余裕は無かったが、ここで生きて行く為だ、これくらい問題ない。

「ここで生きていきますように…」

お賽銭を入れ、お祈りをし、神社を後にしようとした瞬間だった。

「あ、お賽銭ありがとー」

そこには、紅い服を着ていて、腋が露出しているのが特徴の巫女さん 博麗霊夢が居た。

「ん?…つて、霊夢さん?」

「あら、私のこと知ってるの?」

「外人ですから」

「そう。…お賽銭、本当にありがとね」

霊夢さんは自然に笑みを零していた。

生活、そんなに切り詰めていたのか…(´・`・´)

「お賽銭、誰も入れてくれないんですか?」

「あなたが初めて入れてくれたのよ」

「そうですか…神社はお賽銭入るのが普通だと思うけどなあ(´・`・´)

「そ、そうよね!?! やっぱりそうよね!?! そうだよね!?!」

霊夢さんが俺の肩を掴んで涙目で聞いてくる。

現代で当たり前、と言うものは、幻想郷では通用しないのだ。

「でも、霊夢さんがそんなお賽銭お賽銭言っからいけないんじゃない」

神霊…

夢想封印!!

霊夢さんは問答無用の夢想封印を俺に仕掛けてきた。

ちよ、事実は事実でしょ。素直に認めてくれよ(´・`・´)

「ちよw 霊夢さんやめろっわああああ」

何と言う暴力巫女…(。・。・)

まだ住む所も決まって無い悶助。これからどうするかを考え始めたのであった。

2話「異世界」(後書き)

幻想入りしました！

ただそれだけ(´・`・´)

3話「紅き館を目指して」

P M 1 7 : 0 4

…うつつ、身体中が痛い。

夢想封印をまともに喰らったのかと聞かれれば、否ではないが。

そもそも、何であんなに自然に霊夢さんと喋れたのか分からない。
無意識…って訳でもなさそうだし。

「起きたわね」

そこへ霊夢さんがやって来た。加害者とは言え、手当てはしてくれたようだ。

「んと、自己紹介してませんでしたよね？ 俺の名前は…」

「霧雨悶助、でしょ？ちよつと可笑しな名前ね。」

何で霊夢さんが知ってるのだろう、とは思った。

でも博麗の巫女なのだから幻想入りしてくる人物の情報を入手してるんじゃないかと思うと別に疑問では無かった。

「まあ、親から授かった名前ですから。」

「もんすけ…だから、あだ名はもんなんてどうかしら」

もん、か。いいあだ名だ。

あだ名なんて今まで付けて貰ったことの無い悶助は、喜んで了承した。

その後、俺達は今からどこに住むか、と言うのを考え始めた。

「…じーっ。」

「うちはダメよ。神主が許さないわ」

「神主なんて居たんですかw」

「ええ。…それで、いくつか候補があるんだけど」

「紅魔館とかやめてくださいよ」

紅魔館は、悪魔の住む館だ。死亡フラグしか立たないだろうに。

「あら、でも他の所も紅魔館並みに危ないんだけどねえ？ それに、ここから一番近いのは紅魔館だし、道のりも安全でしょう」

「なるほど、だから選んだのか…これが最後じゃないといいですけど。」

「もんなら大丈夫よ。多分」

「はあ…」

多分て。

何と信憑性の無い言葉だろう。俺は頭を抱える。

「な、何よ？」

「いや、何でもありません。んじゃ、行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい」

死亡フラグしか立たないが、とりあえず目指してみることにした。

「あの大きい魔力… あれは魔法使いに転職出来そうね。無職から」
「少なくとも魔理沙よりは大きいわね… 相当な力の持ち主かな」
「ええ。… 多分、七曜の魔法使いよりも魔力は大きいわ」

霊夢は紫の言葉を聞いてぴくつと反応する。

「… 相当ね。スペルカード持たせとけば良かったわ」

「まあ、悶助くんなら大丈夫だと思うわよ？… 弾幕の出し方とか教えてる前提で大丈夫、と言ってるけど。」

「……あ（。。。）」

P M 2 0 : 2 1

悶助は、妖怪に注意しながら紅魔館を目指していた。

「えっと、北へ進めとか言ってたな霊夢さん。」

三時間程歩いているが、未だに紅い建物は見えない。

「まあ、北へ行けばなんとかなるよな。」

気楽な考えで、俺は紅魔館を目指していた。

…夜9時。現在魔法の森。夜となれば、妖怪の出現率も上昇するものだ。

「…紅魔館に着くとかその前に、寝る所が問題だった（・・・）」

食料も道具も武器も持っていない。妖怪達から見れば、格好の餌食だ。

どうしようかと悶助が頭を悩ませていた。魔法を使うか？いや、無理だな。

そうやって立ち尽くしていると、突然一人の少女が現れた。

「あら、こんな所に人間？また物好きな人間も居るものね」

4話「人形師」

「あら？こんな所に人間？物好きな人間も居るものね。」

突如、1人の少女が此方に声を掛けて来た。

金髪の髪に、難しそうな本を持っていて、人形と何やら話している。恐らく、自律人形だろう。

「…アリス？」

「あら、あなたとは面識が無いのだけれど… 何者？」
「シャンハイ」

人形使いであり魔法使いでもある、アリス・マーガトロイドが目の前に、此方をやや警戒しながら立っていた。上海人形だと思われる人形は、剣を装備し戦闘準備に入っていた。

「待て待てw 俺は怪しいものじゃない、外人だ。何故知ってるかと言うのは…」

「…詳しいことは私の家で話しましょう？多分、寝床も無いんでしように泊まらせてあげるわ」

「シャンハイ」

この人は心が読めるのか？w

こう思いながらも素直に嬉しかった。知らない人間を泊まらせてくれるのだ、感謝感激だろう。

アリスはそう言う足早に北へと歩いていった。

上海はまだ警戒心を解かず、剣を構えていたがしばらくすると警戒を解いたのか、剣をしまった。

アリスの家は湖の近くにあり、俺を見つけた場所からはそう遠く無かった。…待てよ？湖？まさか…

「ここが私の家よ。どうぞ入って」
「お邪魔します」

アリスの家の中は、とても整理されていた。足踏み式のミシンがあり、裁縫が趣味なのか？と思いながら部屋へ案内される。

「ここがあなたの部屋。自由に使って構わないわ」
「ありがとう（´；；；）ブワッ」
「話は下で話しましょう」
「はい（´；；；）」

感謝の気持ちでいっぱいになり、若干涙目になりながらも下へ案内される。そして、椅子に座った所で話が始まった。

「さて… あなた名前は？」
「霧雨悶助と言う」
「霧雨…？まさか、魔理沙と関係があるのかしら？」
「魔理沙？」

魔理沙って、神霊廟にも出てきた女性だよな。

「あ、知らないのね。ならいいわ」
「はあ……？」

魔理沙って、まさか消えた妹のことじゃ……ないよな。

「そういえば、私の名前を言って無かったわね。改めてアリス・マーガトロイドよ。」

「改めて霧雨悶助です。アリスさんと言えはいいのか？」

「アリスでいいわよ。あなたは、どう呼べばいいかしら？」

「もん、と呼んで欲しいな」

「そう。んじゃもん。あなたはどこに行く予定だったのかしら？」

「紅魔館。霊夢さんに紹介されて、目指してるんだけど……」

「ああ、ならすぐそこよ。だけど、今は夜だから近づかない方がいいわね。あの姉妹も活動も活発になる頃だし」

……え？すぐそこ？

やっぱり、あの湖は霧の湖だったのだ。嫌な予感が的中し、うなだれる悶助。

「……分かった。ありがとな」

「今日行っちゃダメよ。明日の昼とかにしなさい」

「了解（……）」

「あ、後あなた外来人だったわよね？ちょっと現代と言うのを知りたいわ」

アリスさんは目を光らせながら俺に近づいて来る。
現代の話、か。してあげてもいいよな。

……

P M 2 3 : 4 6

…部屋へと戻り、早速ベッドにハリウッドダイブする悶助。
とてもふかふかで、柔らかかった。

「ふかふかだw w うはw w 気持ち良いw」

これなら気持ち良い朝を迎えられそうだ…（・・・）

さっきまで現代の話しててちょっと疲れてたんだよね。うん

悶助「んじゃ… おやすみなさい。 z z z z z …」

……

A M 2 : 0 1

アリスは、悶助のことについて考えていた。

「弾幕は教えてあげましょうか。…あんな悪魔の館に行くのだから、少し鍛えておかないとね。 試しに？と戦わせましょう」

アリスは、一応教えてあげることにしたのだった。

5話「弾幕と氷精」

AM 8:00

目覚まし時計は無かったが、気持ち良く眠れたので目覚めはとても良かった。

ふと、悶助は思った。

「…ここに住みたいお（．．．）」

住ませて貰えば、紅魔館に行くことにはならず死亡フラグが回収されるのだ。

…しかし、口には出せなかった。流石に図々しすぎるにも程があるだろう。

「あら、おはよう。目覚めはどうかしら」

「最高だ。GJ!」

「そう。良かったわ。…朝ごはん出来てるから、下に来なさいね」

アリスはそう言うと、下へ降りていった。シート、整えないとな。

下へ降りて朝ごはんのメニューを覗いてみると、パンに紅茶、目玉焼きと言う俺に取って最高のメニューが出てきた。これが、理想の朝だ…

「アリス、ありがとな」

「何よ、いきなり。」

「こんなに気持ちのいい朝は初めてだからさ」

「…そう。良かったわね」

「ああ。本当にありがとう。アリスはいい人で、優しい人だ」

面となつて、こんなに感謝の気持ちを伝えられるのは初めてだ。しかも優しいだなんて言われた。

…アリスはやや赤面しながら、朝食を取り終えた。

AM 9 : 30

一旦落ち着いたので、アリスは話を持ち出した。

「もん、唐突だけど弾幕は撃てる？」

「…撃てる訳無いでしょう。ただの人間なんですから」

悶助の言う通りだ。何も力を持っていない人間に、弾幕を撃てる筈が無いのだから。

「あなたに、力があるか試すのよ。弾幕を教えてあげるわ」
「……………」

悶助は、自分に力なんて無いだろう…と言う気持ちよりも、力の有無を確かめたい気持ちの方が強かった。

力があれば、紅魔館での戦闘はなんとかやっていけるような気がする。そう思ったのだ。

「分かった。ご教授よろしくお願いします」

AM9:55

「んじゃ、まず私が手本を見せるわね。撃ちたい弾を想像して、撃つのが基本ね。」

アリスは、そう言つと水色の弾幕を放った。水色の弾幕は、木に当たり木を折った。

あんなのまともに喰らったら、一溜まりも無いな。

「それじゃ、やってみましょうか。丸い弾を想像したら、手を前にかざしてみなさい」

「分かった」

悶助は、赤色の丸い弾を想像して、手を前にかざした。

すると、赤い大きな弾が出現し、悶助の頭上を浮遊し始めた。

アリスは、その弾の大きさに圧倒された。

「!？」

「…アリス?どうしたんだ?」

「え?あー、何でも無いわ。さて、弾幕を動かす方法だけど前に動かすには腕を振りかぶるのよ。」

「ほづほづ。…こうか？」

悶助が腕を振りかぶると、大きな弾が真っ直ぐ飛び、木々をなぎ倒し湖に落下した。

悶助は自分でも少々驚いていた。俺、人間だよな？

この人間、大きい魔力を持ってるわ。

アリスは、悶助は紅魔館でやっていけることを確信した。後は、スペルカードがあれば尚更良いだろう。スペルカードが無くてもやれそうな気はするが。

「よし、あなたに力があることは分かったわ。試しに、湖に居る氷精を倒してきなさい。倒したら、そのまま紅魔館に向かいなさい。いいわね？」

「と言うことは、お別れか？　こんな人間を泊まらせてくれて、ありがとう」

「…もっと力を付けたら、私の所に来なさいね。歓迎するわ」
「うう…（、；、）ありがとう、アリス。さようなら。」

最後まで、いい人だったなあ。

こんな俺に優しくしてくれるなんて（、；、）

P M 1 2 : 2 1

更に興味が沸いたわ。

アリスは、そう思った。あんな人間は、初めて見たからだ。今までも外来人を泊めた経験は幾らかあるが、その中では一番だろうか。

何よりも、魔理沙の兄と言うことにも驚いたし、弾幕もちょっと教えた程度であんな強い弾を出せるのだ。心配は無い。

今度、もんと戦ってみたいわね。

その時は、あの子も強くなってるでしょうね。ふふふ

悶助の成長を期待する、人形師であった。

悶助は、湖に着いた。見渡しても誰も居ない… 氷精と言うのはどこだ？

すると、突如湖から小さい女の子が出て来た。青のリボンに水色の髪。普段湖で過ごしてるからだろうか、裸足だ。

「あなた、誰？ 人間？」

それはまさしく?...では無くチルノであった。なるほど、?なら大丈夫だとアリスは思ったのか。

「なんだ、?か...」

「?じゃないわよ! ?なのはそつちでしょ!」

...そういう所が?なんだよと、溜め息を付く。

反論も子供の貫禄だな。うん

「?と言った仕返しに、弾幕で返してやるわ!」

氷符:

アイシクルフォール!! (easy)

無数の氷柱の弾幕が此方に襲って来る。悶助は落ち着け、と自分に言い聞かせながら、赤色の丸い弾を3つ程想像し、手をかざし、腕を振りかぶった。

赤い大きな3つの弾幕はチルノに向かって飛んで行き、チルノに全弾命中させた。

＼ピチューンノ

「くうつ...覚えてなさい!」

自分も氷柱の弾幕を喰らい、両腕を負傷した。
肉までは貫いていないようだが、出血が酷い。
俺は、ポケットに入っていたティッシュで患部を巻き、湖の氷を潰しアイシングをした。
これではらくは大丈夫だろう。

手当てを終えた俺はチルノが居るか確認したが、チルノは居なかった。
ピチュったのか？しばらくしても襲って来ない。

「倒したのかな？逃げたのかもしれないが… ま、いつか…
・、（」

悶助は、先を急いだ。後少しで、紅魔館だ。

6話「剣と血」(前書き)

今回某セガのハイスピードロボットバトルの武器が登場します。

あくまでレプリカです。人が扱えるように加工した、って感じかな？

6話「剣と血」

「で、でかいな…」

悶助は、遂に紅魔館に着いた。想像してたのとは違い、その大きさに圧倒された。

さつきチルノと戦闘した時の傷はまだ痛むが、痛みは無くなって来て…ない。チルノもなかなかやるな。

おまけにヒリヒリする…これから戦闘とかあるのに、大丈夫か俺。

門の前に来たのは良いのだが、門は開いていた。

隣には中華風の服、橙色の髪に、龍と書かれた帽子を被っている人が居眠りしている。

…紅魔館って、こんなに警備薄かったけ？（…・…）

居眠りしている女性の名前が思い出せない。

本みりんだっけ？くれないみすずさんだっけ？と何とか思い出そうとしたが…諦めた。

ごめんなさい、本みりんさん。（…・…）

安易に紅魔館へは入れたが、見つかったら一間の終わりだ。
あの吸血鬼の生け贄にでもなるんだろうかと思うと、背筋が凍る。
しばらく、館の外で音を殺し潜んでいたが…

「侵入者らしき人物を発見。直ちに戦闘チームは拘束に向かえよ。」

多分妖精メイド隊だろうか、そいつらに見つかったようだ。

「うわ、マジかよ…」

拙いと思うが、武器も持っていない。何か辺りに武器になるものは と思ったが、あるのは草むらだけだ。

「…れ、霊夢さーん！紫さーん！誰でもいいから（ry」
俺には、助けを求める他無かった。
もちろん、ダメもとで助けを求めているつもりだった…

すると、助けを呼んだ瞬間、紫さんが現れた。
まるで待ってました、のようにひょいと現れたが、今はそんなこと
考えてる場合では無い。助けを求めた。

「紫さん、助けて下さい。どうやら妖精メイドに見つかったようで…」

「直接助けてはあげないけど、間接的に助かる方法ならあるわよ。」

…その時はやや混乱していて、紫さんが何を言ってるのか理解出来なかったが、とりあえず方法とやらを教えて頂こう。

「その方法は、何ですか？」

「武器を取って戦う。これしか無いわ。…あなたに、この武器をあげる。」

手渡されたのは、人間にでも持てる1200g程度の重さの剣。リーチはやや短い、金属の剣で威力は高そうだ。

「その武器はデュエルソード。近接用の武器よ。ただ、レプリカだから安物の剣なだけ…」

悶助は衝撃を受けた。

おいおい、某セガのハイスピードロボットバトルの剣じゃねえかwww

初期装備にしては、強かったよな。デ剣コンボ強いよデ剣コンボ。

「いえ…ありがとうございます！！助かりました」

「…まあ、あなたなら出来るわ。保障は出来ないけど」

悶助は無言で紅魔館の中へ去って行った。彼の力は、未知数だ。も

しかしたら、かなり強い力を秘めてるかもしれない。

「でもあの子、あのレプリカの剣貰えてかなり嬉しそうだったわね。外の世界から持ってきた甲斐があっただわー」

紫が満足そうに隙間を閉じた一方、悶助は紫から貰ったデュエルソードで妖精メイド達と戦っていた。

「いやあ、剣貰えるとは思わなかったよ。レプリカでも金属は金属だから十分かな？」

悶助のテンションが上がる最中、そこに戦闘チームかと思われる妖精メイドがやってきた。

「よし、かかってこい！…」

悶助は決闘だと思い妖精メイドが剣を抜く時を待つ。

「メインターゲットを発見。排除します」

妖精メイド達は弾幕を撃ってきた。

あれ？決闘じゃないのか（・・・）

「そういえば、弾幕の存在を忘れてた…」

悶助は、すっかり忘れていた。

何か策は　。

そうだ、アリスが教えてくれたことを今ここで…

しかし、弾幕はもう近くに来ていて、此方から弾幕は打てなかった。

「ええい、剣を振り回せー！」

悶助がデュエルソードを振った瞬間、弾幕が反射された。

そして弾幕は妖精メイドの方に飛び散り、妖精メイドは逃げるように奥へと走って行った。

「くっ、喰らったか」

妖精メイドは上手く撒けたようだが、今度は右脚を負傷。

血がぱたぱたと滴り落ち、傷も皮膚が剥がれ生々しく残っている。ティッシュもチルノと戦った分で使い切ってしまったので、手当ては出来なかった。

悶助は、痛みを堪えながらも何故これくらいの怪我で済んだのか？
と思っていた。

あんなに大量の弾幕を、このデュエルソードが守ってくれたのか…？

悶助は、少し笑みを浮かべた。

悶助「…痛みは残るが、剣に守られては俺も情けないな」

俺は、地面からデュエルソードを抜いた。

この剣は、俺を守ってくれたんだ。今はそう信じよう…

「さて、行きますか。」

1人の人間が、悪魔の館の中へと消えて行っ

7話「大図書館」(前書き)

話は展開速すぎたらいけないと思っているので、結構ゆっくり進ませてもらっています

速いか遅いか分からないけど…(・・・)

7話「大図書館」

P M 1 4 : 1 1

「大分痛みが引いてきたな。右脚はまだ痛いが…ぐっ。」

痛みがやっと引いたのは、チルノと戦った時に受けた両腕の傷だ。俺は、両腕に巻いてたティッシュを外し、右脚に巻いた。両腕の傷は、かさぶたが出来ていたので問題ないと判断した。

「…ただ、俺侵入者扱いされてるからなあ。メイド長やあの吸血鬼に見つかったら…D E A D E N D だな」

だが、メイド長や幼j【規制】あの姉妹と一度は会いたい。と言うか、会わなきゃ来た意味ないな…（・・）

…戦闘やレプリカの剣のことで頭がいっぱいだった俺は、本来の目的を失いかけていたようだ。

俺がここに来た理由は、ここに住まわせてもらうこと。

ただそれだけだ！（・・・）キリッ

「…入ってもいいわ。」

「失礼致します。現在、あの人間が大図書館へ向かっている模様です。」

「ふーん、パチエの所に行くのね。…いいわ、今は好きにさせときなさい」

「承知致しました。」

「……」

P M 1 4 : 4 8

…ん？何か分からないが、俺は外に出てしまったようだ。

「迷子になりそうだな… どこ向かってんだ？俺」

紅魔館の門の付近は晴れていたんだけどな…

濃霧に包まれ、先が見えない。…俺、ジャングルまで来た覚えは無いぞ。

そうこう思ってるうちに、しばらく歩いてたいたようで、大きい建物が俺の目の前に現れた。

「お、また何やら建物を発見したが…まさか、ヴァル大図書館か！？」

本物を目の前にして、改めて驚く。

でも、図書館って別館にあったのなw
俺は吸い込まれるように図書館に入った。

P M 1 4 : 5 4

「…侵入者？それも人間の匂いがするわね」

悶助に気付いたこの図書館の管理人？と言っべきだろう少女が、警戒を始めた。

「パチュリー様…どうしました？」

赤の髪に、黒の服を身に付けた悪魔？が言う。

「人間が侵入したっぽいから注意しなさい」

「見つけたらどうしますか？」

「そうねえ… こっちへよこしなさい」

「分かりました」

月の帽子を被り、紫の服を身に付けている少女の名は、パチュリー
と言うようだ。

すっかり紫もやしで定着していたので、本名を忘れていた。危ない
危ない…

俺は、まだあの赤髪の悪魔？には見つかっていなかった。
暇だったので、本を見てみることにしたのだが…

「幻想郷縁起つて… A Q Nの書いたものだよな、すげえw w お、
ここにも不思議の国のアリスとかあるn」

「見つけましたー パチュリー様」

「そう。んじゃこっちによこして」

うっ、バレた。

俺はどうすることも出来ず、図書館の真ん中辺りまで連れて行かれ
た。

アクロバティック飛行で連れて行かれたので、ちよつと頭が痛い…

「ふーん、あなたが… 例の人間ね？」

「えっ」

「話は聞いているわ。レミィからね」

「えっと、侵入者は侵入者なんですが訳がありました」

「あなたの名前は？」

俺の言い訳を無視し、話を進める。…聞かれたことだけ答えようか。
うん

「霧雨悶助です」

「霧雨…悶助？」

「はい」

「…まさか、魔理沙のお兄さんかしら」

「魔理沙？」

「知らないならいいわ」

毎度毎度、魔理沙って言う人が出てくるな。

…そんなに魔理沙って人は、人気なのかなあ。

「…その剣は何？」

「デ剣…じゃなくて。デュエルソードと言う金属の剣です」

「ふーん…面白い武器ね。でもかなり脆そうだわ」

「レプリカだから尚更脆いと思います（´・`・´）（´・`・´）」

ドンドン！

2つの火のような弾幕が、俺に襲いかかる。
なっ、不意打ちか！？

「あなたを試したの。今度はこれで行くわよ」

パチュリーさんは、水のレーザーと水の大きな泡を俺に撃って来た。

「俺は…剣を信じる！」

俺はデュエルソードで見事にレーザーを斬り、泡も斬ってなくなっていた。

「…っ。やるわね。あなたを甘く見ていたわ」

だけど…

これに耐えられるかしら！？

日符…

ロイヤルフレア！！

「何だ！？この太陽のような光は…」

近付いて来る度に、光の体感温度も高くなる。

此処までか、俺…

……

P M 1 5 : 3 4

「あれ。俺は一体…？」

パチュリーさんは思考停止してるのか、棒立ちのまま動かない。

それよりも、デュエルソードはどこだ？

そう思って握っている剣を確認すると…

デュエルソードの次の剣、「マーシャルソード」に進化していた。マーシャルとは、軍用と言う意味で、軍用の剣と言うことになる。

「あなた…何者!？」

パチュリーさんは少し怖じ気づいたように声を震わせながら、俺に問い掛ける。

「ただの人間ですよ。そんなに怖がらないで下さい、パチュリーさん」

「優しいのね…」

「では、失礼しますね。ここに住むことになったら、その時は…そうですね、魔法を教えてください」

魔法を使えたらいいな—と言う淡い期待である。

ほら、リリルな はとかおジ 魔女とか。

「…ここに住めたら、ね。」

「はい(、・・・)」

俺は図書館を出た。

さっきまでの濃霧は消えており快晴になっていて、何となくだがすがすがしい気持ちになった。

さて、約束したからには生きて帰るか。

悶助は再び本館を目指した。

7話「大図書館」(後書き)

文章力無さ過ぎワロタ。

自分でも痛感してます(´・`・´)

8話「メイドとナイフ」(前書き)

ナイフは新型高振動ブレードかな（＾　＾）と思いました。が普通の銀製ナイフにしました。

咲夜さんがそんな危ない武器持っても仕方ないか（ピチューン

8話「メイドとナイフ」

P M 1 6 : 0 1

…ふう。

俺は今紅魔館の本館に居る。

いつ捕まるか分からない状況だし、剣は構えているのだが…

「誰も居ないのか？まさか、留守とかじゃ…無いよね。」

1階は誰も居なさそうなので、2階へと向かった。

紅魔館、2階。

「お、妖精メイドがちらほら居るな。」

2階へ俺をおびき寄せる作戦か？と思い、マーシャルソードを構える。

「居たよ！こいつだ！」

…やはり、おびき寄せる作戦らしい。

「咲夜さんが、こんな見通せる作戦を出す訳無いよなあ…」

妖精メイド達が立てた作戦なのだろう、と思い俺は少し警戒を強める。

「再びメインターゲット発見。排除します」

妖精メイドは、弾幕を撃たなかった。決闘か？
すると、妖精メイドは鉄の剣を抜いた。
やはり、決闘かと思つたのだが：

「あれ？三人vs一人つて決闘じゃなくね？」

妖精メイドは三人居て、三人同時に剣を引き抜いたのだ。

妖精メイドの鉄の剣は、細い刀身だった。

マーシャルソードの刀身の太さを10とすると、妖精メイドの持つ
剣は2くらいか？

「三人なら勝てる！ここで成敗だ、人間！」

…何故だろう、成敗と言つ言葉はどうしても成敗にしか聞こえない。
どこのジスだよ。

「その細い剣、今にも折れそうだな…」

妖精メイドは斬りかかつて来たが、頭の構造が単純なのか？
挟み撃ちなど全くせず、正面で俺を狙つて来た。
おお、こわいこわい。

とりあえず正面は危ないと思ったので、マツト運動の基本である前転をした。

前に動けば、剣はまず当たらないだろう。

マツト運動、こういう時に便利だね、うん

「とりゃあ!」

「!？」

剣は当たらなかったが、背中が痛い…

前転痛いお(´・・・´)

妖精メイドは俺が前転したせいで足を引っ掛け、顔から倒れたようだ。

「あいたた… あれ？俺のマ剣が見当たらないんだが」

マーシャルソードがどこを見渡しても見当たらない。どこ行ったんだ…？

デュエルソードはレプリカだったのでまだしも、マーシャルソードは話が違う。

俺のマーシャルソード、どこいったんだよ…(´・・・´)

とりあえず無防備ではいけないので、倒れている妖精メイドの鉄の剣を2つ奪った。

「これでダブルセイバーだ…いや、モハの双剣が。…よく見るとオーダーレイピアと似てるな」

ダブルセイバーだから、大技のクロスハリケーンとか…いや、無理だな。まず大怪我する。

あ、モハの鬼人化なら出来るな。

ただあくまで動作だけで、攻撃力が上がる訳でも無いし需要は全くないが。

…つと。遊びはここまでにしておこう。

まだ妖精メイドが居るかもしれないからな。

その頃、紅魔館4階。

「失礼します。お嬢様、あの人間は現在2階に居るようです」

「…そろそろね。咲夜、行きなさい」

「承知致しました。」

P M 1 7 : 0 7

紅魔館2階。妖精メイドが居ないか警戒していたが、どうやらあの三人しか妖精メイドは居なかったらしい。良かった…

2階に居ても仕方ないので、俺は3階へ向かった。

3階となると相当な警備がされているだろうと想定し、慎重に階段を上がる。

3階に到着。

警備はどうなってるかと覗くと…

「彼は3階に居るはずよ、全力で探しなさい」

「了解しました!!」

そこには、紅魔館のメイド長、十六夜咲夜と20人は居る妖精メイドが居た。

このキャラの名前は覚えてたぞ。うん

「…おおう、こわいこわい。なーんて言ってる暇じゃないな」

でも、今更どうやって逃げる？…

窓を見ると、門の前は妖精メイドによって封鎖されており、逃げ道は無い。

「剣も誰が盗んだのか分からないしな…」

目的は住ませてもらうことなのだ。無駄な抵抗はしない方が無難だろう。

俺は観念し、3階の踊場へ向かう。

しかし、そこには誰も居なかった。あれ？妖精メイドと咲夜さんはどこ？

「あら、観念したようね？」

咲夜さんは急に現れ、ナイフを突き付ける。

ついでに、持っていた鉄の剣も奪われてしまった。

「抵抗はしませんよ」

「ふーん、人間なら抵抗すると思ってたけど…心外だわ」

「それよりも俺のマーシャルソード、知りませんか？」

「ああ、あの剣？あれなら2階に落ちてたから回収したわよ」

…え？落ちてた？

でも、確かマーシャルソードはあったはず…

「隙を突きましたね？」

「へえ、バレるなんて思ってたわ」

「いつの間にかあの剣が無くなってましたからね。バレるでしょう」

「（…え？何故私だと分かったのかしら… まさか、私の能力を見抜いてた？…いや、考え過ぎね。相手はただの人間。見抜けるはずが無いわ」

「（…何考えてるんだ？）」

悶助は隙を突き、後ろへ下がる。

「何か考え事でもしてたんですか？」

「…ちよつとね。あなたをどうやって殺すか、よ。」

「俺を殺しても何もならないですよ」

「人間でここまで来れたのは…あなただけよ」

「それは光栄です」

「剣は返すわ。この剣、お気に入りなんでしょう？」

咲夜さんが剣を投げたので、俺は黙って受け取った。
これから何をするか、俺も咲夜さんも承知の上で。

「…二刀流だが大丈夫か？」

と最後にルシ ルのように話し掛けた。

「ここが、あなたの墓場よ」

あちゃー、流石にエ ダイネタは通らないか。

8話「メイドとナイフ」(後書き)

エ ダイネタ入りましたー！

流石咲夜さん。マ剣を盗ったのはあなたでしたね。

血祭りに上げてやる(アーツ

【番外編】東方×B B オープニング（前書き）

グラセフからボーダーブレイクに変更

【番外編】東方×B B オープニング

「はあ？変な境界が出来てる？」

「ええ。境界を無かったことにしようと操ったのですが、どうやら効かなかったようなのですわ」

妙な境界が出来たと言われても…な感じで見つめる霊夢。
また異変は勘弁して貰いたい。

「…別に、幻想郷に影響が無ければ境界はそのままでもいいと思うけど」

「それが影響するのよ。もし大量にロケットランチャー等の武器が来たとしたら、迷惑だしそれは博麗神社に落ちる予定なの」

「…行くわよ。早くそこに行かせて」

霊夢は神社に落とされたらたまらないと、早く行かせるように迫る。

「まあまあ、何があるか私も分からない世界に一人で行くなんて危険過ぎるでしょう？複数人で行くべきですわ」

紫は無駄にキリッとした顔で、霊夢に問い掛ける。

「…それもそうね。とにかく、集めて来て頂戴」

「分かったわ」

そして、霊夢を含めた7人の住民が、集まった。

9 話「決闘、そして吸血鬼」

P M 1 7 : 2 8

「決闘ですね」

「ええ。弾幕も交えながらのね」

相手は俺が能力を知ってることを知らない。
そして、俺は試しに聞いてみた。

「まさか、能力使いませんよね？」

「あら、使つつもりだけど。容赦はしないわよ」

この人は鬼か。とも思ったが、良く考えると俺：

侵入者だった（．．．）

「さて： 始めましょうか！！」

咲夜は早速能力を使った。彼女の能力は、「時を操る程度の能力」。
THE WORLD、時よ止まれッ！とはまた類が違いますよ、お客

さん。

…まあ、やってることは同じだと思うけど。

「ごめんなさいね。だけど、ここまで来たあなたが悪いのよ。悪く思わないでね」

咲夜は大量のナイフを悶助に投げ、微調整をし時を戻した。

「（来た！これくらいお見通しです^p^）」

俺はマーシャルソードを振り回し、ナイフを全て反射させた。
ふう、後1秒遅れてたら本当に死ぬ所だった（´、；）

「っ、反射させた！？」

流石に反射することはパーフェクトメイドでも予想出来なかったか。
しかし、咲夜さんは被弾しなかった。

おいおい、実は人間じゃありませんってパターンかこれ。

「…だけど、そのマーシャルソードさえ壊せばいい話ね。簡単だわ」
「あ（´・`・´）」

しまった、壊すと言う手があったか。

あ、まだあの双剣があるじゃないか。でも…

咲夜「考えてる暇なんて、あるのかしら？」

メイド長は再び時間を止め、マーシャルソードをナイフで破壊しようとしたが…

咲夜「…くっ、硬い。鋼鉄で出来てるのかしら」

マーシャルソードは、基本鋼鉄で出来ている。

デュエルソードとは違い二段階の攻撃が可能になった。隙も大きいが、当たれば即死級だ。

ちなみに、某ロボゲーでは隕鉄塊やチタン鋼を使用する。

「今度こそ、最後かしらね。でも、剣は壊せなかったわ…」

咲夜はナイフを再び配置し、微調整する。
そして、また時を戻した。

「必殺！マツト運動・前転！」

ダメ元のマツト運動。俺、オワタ…

「あれ…血が出てない？」

俺はどこも怪我をしていなかった。
マツト運動マジ便利（＊、＊）

この隙を使って、マーシャルソードを奪おう。

「避けた！！？くっ、また時間を…」

「させるか！！」

俺は遠心力を使って剣を薙ぎ払った。

しかし…

「あ、危なかったわ…」

この時、メイド長にギリギリで時間を止められてたことなど知る由もない。

そして、時は戻る。

「えええ！？おい、当たってなかったのか！？」

ナイフは全方位に俺を囲むように並んでいて、そして襲いかかって来る。

あまりに予想外過ぎるな、これは（、、）

「こ、このマーシャルソードで弾く！」

俺はマーシャルソードでナイフを弾いた…はずだった。

「残念。死角にもナイフを設置してたのよ」

死角を突かれては、どうしようもない。

剣で弾けなかったナイフは左肩を通過したようで、左肩は切り傷で済んだのだが…

「み、右足がつ…！」

右足も剣で弾けなかったナイフがそのまま刺さっていた。肉を抉るような痛みに、苦悶の表情になる。

「結構、楽しかったわよ？それじゃ…さようなら」

咲夜さんは、俺の頭目掛けて回し蹴りをした。

俺の意識は、そこでシャットアウトされた…

その一方、意識を失った悶助をどうしようかと考えている咲夜。

「私が判断することじゃないわね。お嬢様に判断して頂かないと」

…すると、咲夜の方へ歩いてくる小さい女の子。

ピンク色の帽子に服を身に付け、吸血鬼だから小さい黒い翼が生えている。

「咲夜、何をしたのかしら」

「この人間をどうしようかと考えているのですが」

「……。まだ殺しちゃダメよ。パチエよりも大きい魔力があるから」
「？」

咲夜は首を傾げた。

魔力？そんなものが何になるのだろうか、と

「この人間、何か力を持つてる…私と戦わせようかしら？まあ、とりあえず手当てしてやって」

「…承知致しました。」

…ん？見慣れない天井だな、それに俺ベッドの上に居るのか？

悶助は、何故生きてるかも疑問だったがとりあえず身体を起こそうとした。

「いででで！！うー、まだ痛むなあ。チルノの時の痛みとは比較にならない…（．．．）」

両足と両腕には包帯が巻かれていて、手当てがされている。

…この館で手当て出来る人物と言ったら咲夜さんしか

「あら、起きたかしら。人間」

そこには、10歳くらいの幼女が、面白そうに俺を見つめていた。

「あ、あなたは…」

「私の名前はレミリア・スカーレット。この館の主よ。」

おお、生れみりやだ！生幼女、生れみりやだ！

「え、えつと俺は霧雨悶助です。」

「霧雨…悶助（笑）あつはははは！！」

レミリアは大爆笑し始めた。…作者と親を憎むぞ。俺は

「…素直に傷つくんで、やめてください（´・・・）」

「ふー、悶助なんて笑える。久しぶりに笑ったわ、ありがとう」

「…そりやどうも。悶助なんて呼びにくいと思いますからもう呼んでください」

「…実を言うと、別に名前は、自分でも変だと思つのであまり傷つかない。」

俺、怒れない体質だからなあ。

こんな体質じゃなかったら、今頃かんかんになって怒ってたかも。

「もん、ね。分かったわ。それで、あなたに伝えたいことがあるわ」

「何でしょう？」

「あなたは、ここに住むことになったから。」

「…え？今なんて言った？」

「ごめんなさい、もう一度言ってくれませんか」

「住ませてあげると言ってるのよ、拒否権は無いわ」

…おお。おおお！？

うはw こんな上手くいくとは思わなかったwww
心の中で自分にガッツポーズしながら、少し涙目で言う。

「お、俺なんかが住んでもいいんですか！？」

「ええ。よろしくね、もん…だっけ。」

「は、はい。よろしくお願いします（、；；、）」

「（さて…パチエに勝ったこの人間は、どれほど強いのかしら？）」

こうして、悶助は紅魔館で住むことになった。

9 話「決闘、そして吸血鬼」（後書き）

やっと悶助が紅魔館で住むようです。

マーシャルソード、咲夜さんに盗られ壊され…ごめんよ。マ剣ちゃん…（；；；）

10話「能力」(前書き)

今回で悶助の能力が分かります

10話「能力」

AM9:50

悶助が幼「【規制】…レミリアに住めと言われてから1日が過ぎた。

「おはようございます、もんさん」

「あれ？咲夜さん、何で俺の名前を…」

「お嬢様から聞きました。あの時はすみませんでした」

「いや、勝手に侵入した俺も悪いですから謝らなくていいですよ」

元は俺が悪いので、咲夜さんに謝られても困るのだ。

それに咲夜さんは本当に申し訳無さそうな顔をしているので、更に対応に困る。

れみりやにかなり怒られたのかな（．．．）

と思つてると、向こうから話を振って来てくれた。ふう…

「あのマーシャルソードと言うものは、鋼鉄で出来ているのですか？」

マーシャルソードの話か。

マーシャルソードは確か隕鉄塊と…って、隕鉄塊って存在しないよな。

「うーん、鋼鉄で出来てると思いますよ。ナイフでは壊せないと思うし」

「そうですか…あの剣、私壊そうとしていました。ここで謝罪を」

「別にいいですよ。謝ることではありません。それより、鉄の双剣はどこへ…」

「あ、あの双剣、妖精メイドの剣でしたので妖精メイドに返しました」

…咲夜さん、部下に優しいなあ。

わざわざ俺が盗った剣を返しに行くなんて…

「そうですか…わざわざ返すなんて咲夜さん、優しいんですね」

すると、咲夜さんはスカートを少し持ち上げ、お辞儀をした。

「お褒めに預かり光栄です」

…ん？何か、スカートを持ち上げる前の立ってる位置と、持ち上げた後の位置が違うような気がする。

俺は、気になったので問い質してみた。

「あのー、もしかして今時間止めたりしませんでしたか？」

「……………」

咲夜さんはかなり動揺した。やっぱ、時間止めてたんだ…

あれ？でも何で時間を止めるのだろう？

「…それ以上私に質問したら、殴ります」
「す、すみません（、・・、）」

明らかに殺気立っていたので、俺は黙って聞くことにした。
うう、メイドさん怖いマジ怖いよ。

A M 1 0 : 3 8

「…あ、そうだ。もんさん、住むことに関して話があります」

咲夜さんは落ち着いたのか、住むことについて話を持ちかけた。

「もん、で構わないですよ。タメ語でokです」

「そうですか、では。…あなたには、ここで執事をしてもらっわ」

…は？

俺が、執事？

「え、マジですか？」

「マジよ」

「決定事項？」

「ええ。お嬢様の命令だから」

ええええええええええ！？

いや、俺マジで何も出来ないってW
大丈夫じゃない、問題だ。

「どうしたのよ？執事をやるのが嫌なら今すぐ」

「やります！やりますから！」

「それでもいい。あ、後血液型は何型かしら？」

「え？B型ですが……」

「（…一番美味しい血ね。好都合）」

まさかとは思うが、血液型聞いて場合によっては吸血される、なんてことは無いよな…？

敢えて咲夜さんには聞かなかった。咲夜さんを信じたよ、俺。

…そのことが、現実になるのはまた後の話。

P M 1 3 : 3 0

昼食を取り終え、一段落付いた悶助は早速咲夜さんの元へ向かった。部屋を開けると、咲夜さんは執事用の服を用意してくれていた。

「はい、これ。寝る時やお風呂以外はこの服装で」

「ありがとうございます」

「後は出来るわね？」

「…ネクタイだけ、お願い出来ませんか？」

ネクタイの付け方など俺には分からない。高校生でも無いし仕方ない…よね。

咲夜さんはしょうがないわね、みたいな顔で素早く付けてくれた。

…出来れば、もうちょっとゆっくり付けて欲しかったが。

「はい、これでよし。」

「ありがとうございます」

「さて、仕事だけど…その前に、パチュリー様があなたを呼んでるわ」

「そうですか、では行って来ます」

「いつてらっしゃい」

P M 1 4 : 0 4

俺は、大図書館に着いた。

侵入した時の濃霧は無かったが、若干曇り空だ。

「失礼しまーす…」

図書館の中は暗い。夜はここに行きたくないな、うん

「あ、また侵入者さんがいらっしゃいましたー」

「違うわよ。もう住むことになったのよ、この子は」

赤髪の悪魔？に言うパチュリーさん。

「え！？ し、失礼しました。名前言ってませんよね。小悪魔と申します」

「霧雨悶助です、よろしく願いします」

「此方こそよろしく願いします」

あ、小悪魔さんか。あの紅魔郷の4面中ボス。素で忘れてた…すみません、小悪魔さん。

「あなたはどっ呼べばいいのかしら？」

「もん、と呼んで下さい」

「分かったわ。…こほん。もん、あなた能力を持つてるかもしれないわ。」

「本当ですか!？」

おお、俺にも能力があるのか。

やっぱ、魔法を使える能力が欲しいな。ほつきで空飛びたい。

内心w k t kしながら、パチュリーさんの話を聞く。

「まあまだ能力があるとは決まってるけど。どう?確かめる?」

「お願いします(、・・・)」

パチュリーさんは能力の書、と言ったのを使い確かめるらしい。
対象を魔法陣の中に入れて調べるだとか。

「……………」

パチュリーさんは何かを唱え始めた。

しばらく待っていると…

魔法陣が現れた。この中に入ればいいのか、と思い入る。

「そのままですばらく待っててね」

「はい」

20分後。能力の有無が出たらしい。

「出たわ。あなたの能力は…」

…ごくり。固唾を飲んで待つ。

あなたの能力は…

魔法と空間を操る程度の能力。

10話「能力」(後書き)

魔法と空間を操る、ですが魔法は「使える」で、空間は「操る」です。

魔法は操れないよね。うん

11話「スペルカードを作ろう」

P M 1 4 : 3 1

魔法と空間を操る程度の能力。

えっと、これは喜んでいいんだよね？

魔法使えるなら早速お外に出たいです、はい。

「チート級的能力ね。後もう一つ能力があるわ」

「え？」

空想上のものを実体化させる程度の能力。
おお、試しに魔剣実体化してみるか？

「S W - ティアダウナー。」

すると、本当にティアダウナーが出てきた。
どこから出てきたのか知らないが嬉しい。

「マジだ W 　　すげえ W W」

ちなみに、ティアダウナーとは取り壊すと言う意味である。
S W はソードの略なので、まとめると取り壊す剣、になる。

しかし、手に持ってみると随分と軽いな。
またレプリカだったりするのかな…（´・・・）

「この能力は危ないわね。無闇にこの能力は使わないこと。いいわね？」

「はい。ところで、魔法はもう使えるのでしょうか？」

「そうね……試しにほうき貸してあげるから、飛んでみなさい」

パチユリーさんからほうきを貸して貰った。

俺は早速ほうきに乗ったのだが……

「うわっ、制御が出来ないぞ!？」

ほうきの制御が出来ず、ほうきが暴れてしまった。

…ほっきって、暴れるものだっけ（・・・）

「ほうきを握ってみなさい」

「はい！」

俺は急いでほうきを握ると、ほうきが落ちて着き始めた。

パチュリーさんによると、ほづきに魔力を入れないと暴れるらしい。

…なにそれこわい（、、；）

そう言うことは、予め言ってくれ…

「あれ、でも魔力なんて無いんじゃない… ただの人間ですよ。俺は」
「魔法と空間を操れる人間がただの人間な訳無いでしょ」

あう。何も言う言葉が無い（、・・、）
現に、今飛んでるからただの人間じゃないか。

「一旦降りて来なさい。まだやりたいことがあるから」
「分かりました」

俺は一旦旋回して、徐々に高度を下げた。
そして無事に着陸をして、パチュリーさんの所へ向かった。
…うう、お尻が痛い。（、、）

P M 1 5 : 0 9

「今度は魔力を測るわよ。これは魔力を数値化出来る眼鏡。」
「ほうほう、分かりました」

パチュリーさんによると50000を越えると相当な魔力、らしい。

少女計測中…

3分後。

パチュリーさんは計り終えたようだ。
すると、急に俺の肩を掴んで…

「も…もん!？」

パチュリーさんは、身体を震わせている。
あの、落ち着いてください(´・・・´)

「え、パチュリーさんどうしたんですか」
「さっき計り終えたのだけど… あなた、人間じゃないわね？」

お前ら人間じゃねえ! って。
パチュリーさんに言われたくありません(´・・・´)

「いくつだったんですか？」

「…108479。私の魔力は76550だから、私よりも魔力があるのよ」

ちよつと何言ってるか（ry

「嘘を付かないで下さい」

「あら、私嘘は嫌いよ？」

「…（、・・）」

俺がパチュリーさんよりも魔力があるって…

悶助は信じられなかった。人間が魔女に勝つのか？と…

ガタン！！

「！？」

「（、・・）！？」

どこかの扉が開いたのか？周りを見渡すと…

「話は聞かせてもらったー!!」

ああ。やつば幼」【規制】レミリアは可愛いなあ（＊、＊）
カリスマなんてどうでもいいや。うん

そう和む顔でレミリアを見つめていると…

「何よ、もん。哀れみの目で見てくるなんていい度胸ね」
「いえ、かわいいなあと思ひまして」

「お世辞は効かないわよ？それよりもパチエ」
「何？」

「もんにスペルカードを作らせましょう」

スペルカードかー

…溜符「かめはめ波」作ろっ。そうしよう

「ド　ンボール禁止」

…ん？どこからか声がしたがスルーするか。

「んじゃ後はパチエが教えてね。私は忙しいから」
「はい、はい。」

「（やっぱり、もんは強かったわ。だけど…まだ、私には及ばない）」

レミリアはそう言つと出て行つた。

P M 1 5 : 3 2

「んじゃもん。スペルカードなんだけど…」

「一つ思い付いてるものがあるのですが」

「なら話が早いわ。後はこの紙に手を置いて、そのスペルカードの弾幕をイメージすれば出来上がり。」

「分かりました」

悶助はド　ンボールのかめはめ波をイメージした。

すると、かめはめ波のような模様が紙に出来た。成功か？

「成功ね。後は魔力を使って発動するだけよ」

発動のポーズは何でもいいらしい。

「よし…行きます！」

溜符…

この時点でポーズをするらしい。

俺は片手を上げてカード宣言した。

かめはめ波！！

すると、マスタースパークのような光砲が出現し、一直線上を光が包んだ。

俺は叫びながらしばらく放っていたが、しばらく放ってたせいか光砲が消えた。時間制限とかあるのかな？

ふう、かめはめ波はやっぱり気持ちいいn…って！？

かめはめ波の影響で図書館の一部が壊れたのだ。

あちゃー、別のところでやれば良かった…と後悔しても遅い。

あのー、パチュリーさん？

パチュリーさんは怒りを抑えてふるふる震えていた。
パチュリーさんこわいマジこわい（・・・）

「…見事に壊してくれたわね（^ ^ #）」

「…ごめん、なさい（、・・、）」

色々と大変な紅魔館の生活。

悶助は、この生活に付いていけるのか心配になったのだった。

12話「人里での出会い」

パチュリーさんより魔力があることを知ってから一日が過ぎた。

俺は人里へ買い出しに行くように咲夜さんから言われた。
レミリアのティータイム用のお菓子が無くなっただけらしい。

俺は、すぐに支度しほうきで人里へと向かった。

P M 16:00

人里でそのお菓子が売っている店に着いた。

ほうきに跨いで空を飛んだのだが、図書館で飛んだときりほうきでは飛んでいない。

…やっぱ、いきなり行かせる咲夜さんも咲夜さんだよなあ。

地上100mでも怖いお（・・・）

すると、商人が俺の顔を見る度話しかけた。

「あんた、見ない顔だな。どこに住んでるんだ？」
「紅魔館に住んでるよ」

商人は大層驚いた顔をした。まあ、吸血鬼の館だからな…

「良く住ませて貰えたもんだなw」

悶助「あの館に到着するまでの道のりも長かったもんだ」

「もつと、話を聞いてみたいな。どうだ、30分くらいいいけるか？」

「大丈夫だ」

「よし、んじゃ中に入って入って。」

少年談話中…

商人は、外来人には興味があるようで外の世界のものや道具を教えた。

商人は、頷くばかりだったがかなり為になったようだ。

「色々教えてくれてありがとよ！また来てくれた時には歓迎するぜ」

「おう、それじゃあな」

商人に別れを告げた…その刹那。

「どいて下さいーいー！ー」

「（、、）！！？」

ドン！！

あいたた… 何が起こったんだ？
そう思いながら身体を起こしてみると…

緑色の綺麗な髪に、この人も巫女さんなのか？霊夢さんと同じく腋が露出していて、蛙と蛇の髪飾りを付けていた。

「すみません、急いでいたもので…」

「ん？あ、大丈夫だよ。」

「そうですか、良かった…」

…ん？この人、見たような気がする。
俺は、思い切って聞いてみた。

「えっと… もしかして、東風谷早苗さん？」

すると早苗さんは立ち上がり…

「え？そ、そうですけど何で私の名前を…」

「俺、外人だから外の世界で知ったんだ」

「なるほどー あ、あなたのお名前も伺っていいですか？」

「俺は霧雨悶助。…あ、早苗さん急いでたんだっけ？邪魔してごめんな。んじゃ」

「あ、待ってください！」

早苗さんは俺の手を掴んだ。

掴む手は、霊夢さんと同じくらい小さいような気がした。

「（、、）？」

「こ、今度会ったら…うちの神社、来ませんか？」

会うの前提w

…こほん。確か早苗さんの神社って二人の神様が鎮座してるんだっけ。

大丈夫かな俺（、、）オラだんだん不安になってきたぞ。

「え、いいの？」

「はい。明日のお昼頃に来てください、案内します」

「…ありがとう。」

「では、私はここで失礼しますね」

「ああ。んじゃまた明日。」

早苗さんはそう言つとすぐに小走りで去っていった。

さて、俺もそろそろ帰らないと…

げっ、17時56分!?

やばい。咲夜さん、どんな顔して待ってるだろうなあ…（
、
）
・
・

P M 1 8 : 0 6

俺はようやく帰宅し、バレないようにキッチンへ行くと…

「遅い。遅いわよ。何してたの?」

そこに不機嫌な顔で出迎えたのはやっぱり咲夜さんだった。

「早苗s…いや、ちょっと山の上の巫女さんとお話をしてて（ry
「早苗でしょ。いつの間にか仲良くなってたのね?」

「あら、咲夜それは嫉妬かしら?」

「お嬢様!？」

傍で聞いてたのか？レミリアがひょっこりと現れる。
咲夜さん、誰に嫉妬してるんだろ？

「あ、そうだもん。あなた、今夜私の部屋に来なさい。」
「えっ」

「拒否権は無いわよ。館の主は私だからね」

「分かりました、行きますよ（´・`・´）」

「あ、お料理のお手伝いお願いね」

「料理の経験無いですよ」

「居ないよりはマシよ」

咲夜さん酷い。マジ酷いよ（´・`・´）

そんなことよりレミリアが俺を部屋に誘うって…
嫌な予感しかないんですが。

AM0:01

レミリアの部屋にて

「さて… あなた、B型だったわよね？」

「俺は逃げるぞ！逃げるぞおお！！」

何この吸血フラグ。

逃げるしか選択肢に無いっす。

「あ、待ちなさい！！ 咲夜！」

「あなたの時間は私のもの 私の時間は私のもの」

「どこのジャンですか（´、`）」

まあ、見る限り咲夜さんやレミリアも俺には親しく接してくれてるのかな…？

「いや、ただの執事として接してるけど」

「お嬢様と同じく。」

心まで読むなんてあなたたちは何者ですか。超人？さいですか。

…いや、超人と言えば超人だよなこの二人。

もう幻想郷の住民って人里に住んでる人を除いてほぼ超人なんじゃない？

無論、チルノも不老不死な訳だし。？だけど

そう思えた一日であつた。

13話「俺と巫女と妹と」

「レミリアお嬢様。今日、博麗神社に行ってもよろしいでしょうか？」

うう、お嬢様なんて慣れないなあ（・・・）

執事だから仕方無いと言うか、今日初めてお嬢様って呼んだもんな。

「…博麗神社？霊夢のところへ行くのかしら」

「はい。霊夢さんに少し用がありました」

「なるほど。それなら私も行っていいかしら？」

レミリアが顔を近付けてくる。

あの、近付ける意味が分からないんですが…

「へえ… 私が顔を近付けても緊張しない人間は、初めて見たわ。」

「さいですか」

まあ、色気は…幼女だし無いよね。

するとドキドキする要素が無いのですよ、お嬢様。

「失礼ね！どうしたことよ!？」

レミリアを俺の心を見事に読み、怒りながら問う。

「いや、事実ですから」

「…ふふふ。ふふふふふふ。いい度胸よ、もん。今夜どうなるかを」

「ごめんなさいマジごめんなさい（、；、；）」

昨日結局吸血されたので、また吸血されるのは遠慮したい。

…まあ、吸血と言ってもほぼ血こぼしてたけど（、、；）

「もう行く気失せたわ。一人で行って死ね！」

「ひどいでお嬢様（、・・、）」

そうレミリアに罵倒されながらも俺は紅魔館を出た。

AM 9：56

俺は紅魔館を出発した。

博麗神社を目指しほうきで飛んでたが…

「今日は気持ち良い快晴だなー 日向ぼっこしたい気分だ（、、）」

と言っわけで

俺は日向ぼっこをすることにした。

場所は…霧の湖でいいかな。今日ちょっと暑いし

ふう、気持ち良い…

霧の湖を選んだのは正解だったか、と寝転びながら思う。

時計を見ると、10時を過ぎていた。

それも20分くらい経っていたので、そろそろ神社へ…と考えていた刹那。

「あなたは食べられる人間？」

俺の目の前には、金髪で黒い服を身に付けている少女が顔を覗かせていた。

何か、今物騒なこと言わなかったか？（、、；）

「俺は食べられないぞー」

「そーなのかー」

とりあえず、名前を聞いてみることにした。

これからも会うかもしれないし、名前くらい知つとかないな。

「名前は何て言うんだ？」

「…ルーミア。」

「ルーミアか、よしよし。あまり、人は襲うもんじゃないぞ？」

「えへへ…」

ルーミアは頭を撫でられて嬉しそうだった。…意外と、かわいいなおい。

「んじゃ、俺はこれで。バイバイ、ルーミア」
「バイバイ」

俺は、霧の湖を後にした。でもルーミアって…

人喰い妖怪だっけ。

危なかったなー 朝だからまだ良かったけど、夜は気を付けられないな…

一方、その頃博麗神社には黒い帽子を被った少女が遊びに来ていた。

「おーい霊夢、遊びに来たぜー」

「お菓子は無いわよ」

「今はお茶が飲みたい気分だからいらないぜ」

「そう」

AM 10:44

博麗神社が見えて来た。

遠くからは良くは見えないが、霊夢さんが居るのは分かる。

隣の魔法使いみたいな女性、誰だろ？神霊廟で、自機キャラとして出たあの少女か？

「まさか、とは思っけど…（、）！！？」

しばらく飛んでる間に、もう博麗神社の目の前まで来てたようだ。更に、鳥居にぶつかりそうになって避けようとしたが…遅かった。

「うわああああ（ry…ぐはっ。」

俺の意識は、またもやシャットアウトされた…

見慣れない天井だな…どこだ？ここは

「あ、大丈夫？あんた二時間も寝てたのよ？」

そこには、心配そうに見つめている霊夢さんが居た。

そうか、俺は博麗神社に…

「う、ちょっと鼻が痛いな。皮剥けたかな？」

「皮剥けただけで済んだのは、結構すごいわよ…」

…ターミ ーターじゃないよな？俺

でも、軽い怪我で済んだのはいいことだ。と思っていると…

「お、起きたようだな。大丈夫か？」

黒い帽子を被った魔法使いの少女が、顔を覗かせてきた。

あれ、この人…

「…魔理沙？」

自然と言葉が零れた。

…神霊廟の時から気にはなっていたが、完全に霧雨魔理沙と言ったことが分かった。

「あ、兄貴…？」

兄貴…まさか、魔理沙が

「まさか遠足のバッグ残して消えた妹って…魔理沙なのか!？」

すると、霊夢さんが口を挟んだ。

「え！？ 魔理沙のお兄さんってもんだったの！？」
「お、おう。バッグを残して消えた妹ってのは、私だぜ」
「…何か、邪魔したわね。失礼するわ」
「ああ。悪いな霊夢さん」

AM 11:12

「…そうか。そういえば、魔理沙って名前だったな。」
「思い出すのが遅いんだぜ」
「ごめんごめん。それで、何でここに…？ 紫さんか？」
「当たり前だ、紫に連れてこられたんだぜ。神隠しだのこのうの言っ
てな」
「そっか。…魔理沙が紫さんに攫われた後の話、聞きたいか？」
「いや、遠慮するぜ。また…暗い話なんだろ？」
「ああ。公園に捨てられたさ」

魔理沙は、そう俺が言つと涙を流し始めた。

「兄貴…良く生きれたな…」
「何も、泣くことじゃないだろう」
「泣くことだっ…！！」

魔理沙の涙ぐんだ怒声に、俺は心打たれる。

「魔理沙……ごめん」

「分かれば…いいんだぜ」

「…ここでの生活も、苦しかっただろう？俺と親が居ない生活なんてさ。」

「ずっと…寂しかったぜ。孤独だった。今は霊夢とか居るけど、兄貴が魔理沙、と言うまでは寂しいままだったぜ」

「…そうか。俺よりも、数倍は辛かったよな。折角だ、再会出来た奇跡に抱き合って喜び合おうじゃないか」

……………兄貴！！

俺と魔理沙は、同時に強く抱き合った。

まるでお互いの辛い過去を、一気に消し去るように抱き合う。

今は、何も考えずただ抱き合おう…

しばらく俺達は抱き合っていたが魔理沙が落ち着いたようだ。

「もう離れていいぜ」

「ああ、分かったよ」

「あ、のさ兄貴」

「ん？」

「こつちでも…よろしくな」

再び会えた喜びを抑えているような顔に、俺も顔が緩む。

「ああ。よろしく。魔理沙」

妹が魔理沙と言うことが分かり、俺の心が喜びに満ちる日になった。

P M 1 2 : 1 5

一方、霊夢さんは軒先でお茶を飲んでいた。

「兄と妹か… 私も妹だったら抱き合えたのかなー」

若干、兄妹と言う関係が羨ましく思えたようだ。

「霊夢さん、ちょっとここで聞いてもらえるかな？」

霊夢さんが軒先でお茶を飲んでいたので、今だと話掛ける。

「何？」

「紅魔館で住めることになったんだ。紫さんの助けもあったけど、
霊夢さんが居なかったら今頃死んでたかもしれない。本当にありが
とう」

お嬢様に許可を得てまでここに来た理由は、霊夢さんにお礼するこ
とだ。

…まさかの再会で、忘れかけてたけど（．．．）

「…私は、紅魔館と言う場所を紹介しただけよ」

「それでもだ。ありがとな」

霊夢さんは小さく笑みを浮かべ…

「…ふふふ。変な人」

「誉め言葉なのか？」

「うーん…誉め言葉かな？」

霊夢さんは、顔を少し赤く染めながらニコツとしていた。

やっぱ、幻想郷の超人達ってかわいい人ばかりだよな…

「今日はいいい気分だからお賽銭入れてやるぜ！んじゃ、私はお先に失礼するぜ」

「は！？ちょ、魔理沙！」

「俺も失礼するよ。お賽銭、少ないけど入れていくぞ」

「…二人とも、いい奴じゃない」

魔理沙は、上機嫌で魔法の森へと消えていった。

今度、魔理沙の家行こうかな。

消えた妹との再会に、笑みを零すのだった。

14話「495年間」

AM10:22

魔理沙と再会してから1日が過ぎた。

俺は、執事としていつも通り仕事をしていた。

そして、咲夜さんから窓拭きをするよう頼まれていたのだが…

「ふう、大変だな。窓何枚あるんだ（、・・、）」

流石に四階建ての大きな館だけあって、バケツを持ちながらの作業はきつい。

少し、休憩しようか…その時だった。

「あら、こんな所に居たのねもん」

そこへレミリアがやって来た。

起きたばかりなのか？少し眠そうな顔をしていた。

「おはようございます」

「それよりも…妹との再会はどうだった？」

おいおい、何時の間に居たんだ貴女は…（、・、）

俺は若干ジト目でレミリアを見つめる。

「…見てたんですか？」

「まあね」

すごく何かに満ち溢れた顔をしていたので、ついでに聞いてみた。

「何か、良いことでもあったんですか？」

「聞きたい？聞きたい？」

レミリアが顔を近づけて来る。

いつもに増して目がキラキラしていたので、少しびっくりした。

「まあ、まあ聞きたいです」

「教えてあげない」

…やっぱり子供だなw

そう思いながら、俺は自然と言葉を零した。

「…この時が、一番可愛いんだけどな」

俺は、無意識に窓を拭き終え、三階へと移動したのだった。

「かわ、いい？ …な、何よそれ！全然嬉しくないんだからねっ」

P M 1 2 : 4 0

やっと窓を拭き終え、咲夜さんの元へ向かった。

「拭き終わりました… ふう、きつい。」

「大変だったでしょう？ 普段は私が全部してるんだから」

そうか、咲夜さんも苦労してるんだなー

っておい。

確か、俺が初めて紅魔館に来た日は妖精メイドが窓拭きしてたよな？
疑問にしか思えなかったので、聞いてみた。

「…俺が初めてここに来た時は、妖精メイドが窓拭きしていたような気がするんですが。」

「ぎくっ…忘れてなかったのね」

「一週間前ですよ!? 俺の記憶力でも（ry」

「……ご、ご飯出来たからあっち行ってなさい! THE WORLD Dするわよ!？」

あれ、咲夜さんもJOJOネタ知ってるのか？

…あ、でも幻世「ザ・ワールド」って言うスペルカードあったよね。JOJOネタ分かる人と言えば…

「時よ止まれッ!」

やはり貴方がwww
ですよー

「早く行かないと追加でナイフもあるわよ」

「分かったからそのナイフしまえ（´・`・´）」

俺はすぐにレミリア達が居る場所に向かった。危ない危ない…

P M 2 0 : 5 1

俺は、一通り仕事を終えて休んでいた。

「ふかふかだー（＊、＊）」
「やっぱ、ベッドは最高っすなー。」

至福の時間を味わっていると…

「あ、居た。もん、話があるわ。ここでいいから聞いて頂戴」
「あいあい」

急にレミリアが部屋に入ってきた。

いつもよりも真剣な顔つきだったので、びっくりしたが…

それほどの大事な話なのだろう、と思い椅子に腰を掛ける。

「さて…もん。私から直々に頼みたいことがあるの」
「はい、何でしょう？」
「…私の妹のことなんだけど」

妹なんて居たのか…

俺は、とりあえずその幼「【規制】妹について聞いてみた。

「妹？」

「ええ、フランって言っただけだね。495年間、今日まで地下で幽閉しているの」

495年間だと！？ おまwww

吸血鬼って成長しないのかな？ 頭とか胸とか。

「…何か失礼なこと考えてなかった？」

「考えてないです（；、）」

「…本題に戻るけど、フランを外に出してあげたいと思うの」

「俺は、そのフランを外に出す役目な訳ですか」

「そう。私が外に出そうとするとすぐ弾幕ごっこになるから…もん
に行って欲しいの」

話をまとめると、フランをとりあえず外に出せばいいらしい。

…しかし、495年間も幽閉されていたのか。
流石に心も閉ざしてるんだろっなあ…どうやって心を開けさせるか？

「お願い…出来るかしら？」

レミリアに懇願されては、NOとは言えないだろう。

答えは勿論…

「分かりました。」

P M 2 2 : 4 8

俺は、図書館にやってきた。

図書館の地下に、フランは居るらしい。

「あら、久しぶり。」

パチュリーさんが声を掛けて来た。
何か、難しそうな本読んでるな…

「久しぶりですね、パチュリーさん」

「ところで、付き合っただけいいことがあるのよ。いいかしら？」

「はあ。ちょっとならいいですよ」

パチュリーさんはそう言うと、一冊の本を取り出した。

「あなた、この呪文を読んで幻獣グリフォンを召喚出来る？」

幻獣グリフォン？

北欧神話とかそこら辺の、幻獣だっけ。

「呪文が読めれば、の話ですが…」

「魔力があれば読めるわ」

「ほうほう。ならば読みましょう」

パチュリーさんよりも魔力はあるから、召喚なら何とか出来るか？
俺は、その本を受け取り呪文を読んだ…

読むこと5分。

長いなおい。幻獣だけあつて召喚するのは大変だ…
やっと最後の文を読み終え、魔法陣が出現した。

「よし！そのまま待つてればおkよ」

パチュリーさんに言われるがままに、待っていると…

馬に翼が生えた生物が出現した。

これがグリフォンなのか、生グリフォンだ。オラすごくワクワクしてるぞ。

「おお、これがグリフォンですか」

「貴方…やっぱり欲しいわ」

「え？」

「…いや、何でも無いわ」

「はぁ… あ！？ 俺、ちょっと急いでるんで失礼しますね！」

時刻は23:37。

睡眠時間を確保する為に、俺はフランの元へ向かったのだった…

14話「495年間」（後書き）

次話、フランと弾幕ごっこです。

幻獣グリフォン、馬の形をして翼を生やしてるってWikipediaに乗ってた記憶があったので書かせて頂きました。
Wikipediaでもう一度確認しておきます

【番外編】東方×B B 第1話（前書き）

東方×ボーダーブレイク。

ボーダーブレイクはググればすぐに分かります。

駄文です。駄文でもいいならお読み下さい

【番外編】東方×B B 第1話

博麗神社にやって来た、6人の住民。

まずは一人目：

「紫が呼ぶなんて珍しいな。気まぐれか？」

霧雨魔理沙。

二人目。

「大妖怪が直々にお呼びなんてね。何かの異変？」

レミリア・スカーレット。

三人目。

「お嬢様の付き添いですが故」

十六夜咲夜。

四人目。

「今日は妖怪の山で宴会する予定だったのに…」

東風谷早苗。

五人目。

「あらあら、随分集まってるわね」

西行寺幽幽子。

六人目。

「…また異変か何かなのかしら？こんなに集まって」

八意永淋。

「6人集まりましたわ」

「選んだ理由は？」

霊夢は無表情で紫に質問する。

「魔理沙が正解」

「やっぱりな」

「え、どこに行くんですか？」

「行つてからのお楽しみ」

「異変解決とかは、やりたくないわよ」

「いいじゃない」面白そうだし「レミリア」異変なんて久しぶりじゃない、早く行きましようよ」

2名程文句を言うも、霊夢達7人はボーダーブレイクの世界へ飛び込むのであった…

15話「地下の血闘」

P M 2 3 : 4 5

今、俺はフランの部屋だと思われる扉の前に居る。

「何だ、これ……」

その扉には、何重もの鎖が掛けられており、所々には血痕が付いていた。

人の骨や破れた血のぬいぐるみ、終いには人の腐った肉も散乱している。

「俺、生きて帰れるかな（．．．）」

いや、マジで不安なんです。

弾幕ごっこになるだろうなあ…と、俺は静かに扉を開ける。

「これはひどい。 骨が大量に散乱してる」

部屋の中は、ランプが一つ灯されていて、テーブルには飲みかけの血の紅茶。

部屋の奥は…骨で埋め尽くされてるな。

「誰？」

部屋の奥から、レミリアと同じ位の少女が出て来た。
金髪に赤色の服を身に付けている。

「この娘が…フランか」

「私の名前知ってるんだね。 あなたは誰？」

「霧雨悶助。 人間だよ」

「新しい遊び相手？ 弱そう…」

「弱そうで悪かったな（´・・・´）」

遊び相手…勝てるのか？

でも、まともにやりあっても勝ち目は無いだろうし（´・・・´）

そう考えていると...

「んじゃ、強いんだね。あはは……」

[illegible]

禁忌「クランベリートラップ」

四方八方に迫る弾幕が、悶助を追い詰める。

おいおい、いきなりスペルカードなんて何てことをするんだこの娘は。

俺は、通常弾幕でとりあえず凌いだ。

それにしても、弾幕の量が多い……魔力も幻獣を召喚したせいで殆ど残っていなかった。

「あれ？壊れてない……」

「弾幕なら打てるからな」

「そっか……んじゃ、遠慮無く」

フランは低空飛行しながら俺を追尾し、弾幕を撃ってくる。
くっ、魔力は殆ど無い状況でこれはきついな。

「壊れちゃえ！壊れちゃえ！！」

禁忌「レーヴァテイン」

「うわっ、何だこのレーザー！？」

極太のレーザーが薙ぎ払いで襲いかかってくる。

…まともに当たったら丸焦げだろうなあ。上手に焼けましたーっ
てか。

俺は避けた。

避けたのだ。

十分避けれる範囲だった。

しかし、予想以上に大炎剣レーヴァテインの攻撃範囲は広がったのだ。

かすただけなのに、俺の右腕の一部の皮膚が一気に溶けて、肉がむき出しになってしまった。

うあああああああ！！

俺の想像を遥かに超える痛み。

まさに、空前絶後の痛みである。

痛みが強すぎるが故に、俺は立っても居られない状況だ。

折角消えた妹とも再会したのに…

まだ、幻想郷に来たばかりなのに…

こんな所で…

死ねるかよ！！

「……くっそ、何か攻撃を仕掛けないと……」
「何で逃げるの？逃げて楽しい？タノシイ？」

フランは、ゆつくりと俺との距離を縮めて行く。
近距離では何をされるか分かるまい。
何か、武器でもあれば…

そうだ。俺にはもう一つ能力があつたじゃないか。

「空想上のものを実体化する程度の能力」
だっけ？忘れたけど、これで何か武器を出せば…！

ラストサバイバー・レプカ！！

ラストサバイバー・レプカが出現し、俺はレプカを力強く握る。
輝く剣の刃は、鋭く光っていて、力強さを感じさせられる。

フランは今狂気の状態だ、何か攻撃をしなければ俺は死ぬ。
死ぬとフランを助けられないし、俺自身も悔いが残る。

…フランを出来れば傷つけたくは無い。
だが、助ける為にはそんな綺麗ごとを言ってる場合ではないだろう。
フラン、すまない。許してくれ…

「今度は…逃げないでよね？ニゲナイデネ？」

禁忌「カゴメカゴメ」

全方向の弾幕が俺に襲いかかる。
相変わらず、腕の痛み具合は厳しさを増すばかりだ。
肉が乾きそうだよ、マジで（・・・）

俺はレプカを左手に持ち、フランに突撃した。
右腕は激痛が走って機能しない為、左腕だけで剣を握っている状態だ。

チエストオオオオ！！

俺は、全身全霊で目的に襲いかかった…

「……剣で突撃は予想してなかったわ」

フランは接近戦を予想して無かったのか、そのまま俺の攻撃を受け止め、吹っ飛んだ。

しかし…

「あははは、結構痛かったよ？イタカッタヨ？」

フランは、俺の攻撃を受けてもびくともしなかった。
刃は鋭いはずなんだが…威力が足りなかったか？
俺の渾身の一撃は、フランには全く効かなかったのだ。

「おいおい（．．．）」

吸血鬼って、身体も頑丈なんだな…
俺みたいな人間じゃレプカの刃で真っ二つだと思う。うん

無我夢中で突撃していたせいで、身体の状態を良く見ていなかった。
俺は、改めて確認すると…

「うっ、太もも喰らってたのか」

さっきのフランのスペルカードで、太ももを負傷したようだ。
肉がむき出しになるほどの傷では無かったが…
一撃一撃が大きいので、切り傷でも重症になる。

「う、動けるか！？俺！」

やられてはならないと、自分を必死に励ます。

諦めんなよ！ダメダメ諦めちゃ！どうしてやめるんだそこで！
…修造さんの言葉、こういう時に思い出すと力湧くよな。

「これで終わりにする…オワリニシテヤル…」

Q E D…

495年の波紋!!

赤く小さな弾幕は、波紋状に広がってこちらに襲いかかってくる。
このスペルカード、一番怖いんだよね（・・）

「…遊びのレベルを超越してるんだが大丈夫か？」

悶助は独り言を呟く。大丈夫じゃない、問題だ。

俺は決心した。

「ここで、決めるしか無いな」

悶助はそう言うと、一枚のカードを取り出した。

そして、気力を全て使いカード宣言をした。

溜符…

かめはめ波ああああああ！！

A M 1 : 3 3

「うう、負けちゃった…」

「何とか勝った…」

俺はフランに何とか勝った。

かめはめ波が決まったらしく、その前にもダメージを受けていたフランには少々きつかったようだ。

…若干涙目になっているフランは、何かかわいかった。

幼「【規制】姉といい、妹といいどっちも可愛いなあ（・・・）」

おっと、本来の目的を忘れていた。

今なら聞いてくれるだろうと、俺はフランに話掛けた。

「フラン、外に出てみないか？」

「外…？」

「そうだ。ずっと、幽閉されていたんだろ？」

「うん。ずっと、生まれてからここに閉じこめられているの」

生まれてから…か。

フランは、ずっと寂しかったんだな…

「…寂しかっただろうに。今外に出してやる」

「お姉様に殺されても、知らないよ…？」

「レミリアは、まだフランを見捨てた訳じゃない。…ずっと待つて
るんだ、フランを」

「待つてる…私を…」

「フランとレミリアは家族だ。勿論、咲夜さんやパチュリーさんも
家族だ。そんな家族であるフランをレミリア達が見捨ててる訳ないだ
ろ？」

「家族…私は、家族に入ってもいいの？」

「勿論だ。…今まで、幽閉されて辛かっただろう？けど、もう大丈
夫だ。フランは一人じゃない。…お姉様達が、きっと笑顔で迎えて
くれるぞ」

「……………うわあああああああん！！」

フランは、大号泣した。まだ、お姉様達は私を見捨ててなかったん
だ…咲夜も、パチエも…

結局、その日は朝の5時半までフランは泣いていた。
泣いた後は、すぐに眠りについた。
眠ってる顔は可愛くて、弾幕ごっこの疲れが吹っ飛んだような気がした。
(＊、、)

あ、早くレミリアに報告しないと。レミリア、起きてるかな…

AM 7:33

レミリアの部屋へ行くと、レミリアは起きていた。

「あ、どうだった!？」

俺を見た瞬間、肩を掴んで俺に問いかける。

その目は、真剣な眼差しではあったが少し殺気立っているような感じだった。

「お嬢様、落ち着いてください。」

「落ち着けないわよ!どうだったの!？」

あー…

何を言っても無駄だと思ったので、俺は上手く行ったことを伝えた。

「…と言う訳で、上手く行った感じですよ」

「…良くやったわ。もん、あなたには感謝の気持ちでいっぱいよ」

「ありがとうございます。フランが起きたら、外に連れて行きたいのですが」

「外に連れて行く前に、何か教えてあげなさい。そうね…人間の遊びとか？」

「分かりました」

「それよりも、その傷を手当てしないとね。本当、良くやったわ…」
「ありがとうございます（、・・・）」

AM 11:30。

フランがそろそろ起きる頃かな？と思っていたのだが…

「おっはよー」

（、・・・）！！？

フランが俺の背中に乗って来た。

…ポキッって音がしたんですが（、・・・）

「お、おはよー。フラン」

「ねえねえ、名前何て言うんだっけ？」

「霧雨悶助。もんって呼んでくれ」

「うん、分かったっ」

フランの笑顔は、太陽並みに眩しかった。

…レミリアよりも可愛いなあ（´・`・´）

「あら、フランの方が私よりもいいのかしら？」

「いいとは言ってますんw」

「んじゃ、咲夜を呼んで私の部屋で…」

「…何する気ですか。」

「色々」

「フラン、あつちで遊ぼうか」

「うん!!」

「あつ、待ちなさい!…（フランにも勝つなんて…私ももんに本気出して大丈夫かしら?（笑））」

フラン、嬉しそうだなー。

紅魔館に住んで良かったと、感じる日であった。

16話「妖怪の山」

AM9:20

あれから2日。

フランが加わった紅魔館は、活気に溢れていた。フランの笑顔は、見る人を元気にさせると思う。無論、俺も元気付けられている一人だ。

一つ、変わったことと言えば…

パチュリーさんが俺を頻繁に呼ぶようになったことだろうか。今は幻獣の召喚にハマっていて、魔力のある俺に召喚をして欲しいだとか。

因みにラストサバイバー・レプカやSW・ティアダウナーは図書館で保管して貰っている次第だ。

「あ、居た！もん、一緒に遊ぼう」

フランが、いつものように背中に乗ってくる。

…乗る分には軽いからいいんだけど、力が強いからなあ。

「お、フランか。そうだなー 今日人間の遊びを教えよう」
「どんな遊び!？」

フランがwktkしながら聞いてくる。

小さい頃は、誰だって好奇心旺盛だよな。うん

「かくれんぼ。ルールは簡単、俺が隠れてフランが俺を見つければ勝ちってことさ」

「なるほどー、んじゃ私が見つける側ね！」

「俺が隠れる側か。うーん、どこに隠れようかな？」

「1分数えるね 60:59:58…」

「楽しそうね。あの二人」

「ええ、とても微笑ましいです…」

「午後から、パチエも混ぜてトランプしようよ。5人で…ね」
「いいですね。みんなでやりましょう」

P M 1 2 : 3 5

「ごちそうさまでしたー！」

「綺麗に食べたな、フラン」

俺はフランの頭を撫でる。

「えへへ…」

「妹様、後でパチユリー様の所へ来て下さい。お嬢様もお待ちしております」

「パチエの所？分かったー」

さて、俺は人里で新たな出会いを求めますか。

「お嬢様、人里へ行きたいのですが」

「何か用事があるのかしら？」

「ええ、ちよつと」

「そう。なら行ってらっしゃいな」

「あい（、・・・）」

「え、もんは来ないの？」

フランがうるうるした目で悲しそうな顔をする。

やめてくださいフランさん、可愛い過ぎて死にます（、・・・）

「ちよつと用事があるんだ、ごめんな」

「いつ帰って来る？」

「そうだなー、夕方には帰るよ」

「約束だよ？」

「ああ。夕方には帰るからさ」

「うんっ」

「……………」

人里と言う言葉で、咲夜さんが不機嫌そうな顔をしたけど何でだろう…

疑問に思いながらも、俺は出発した。

P M 1 3 : 1 1

俺は人里に着いた。
ほうきのコントロールも慣れてきて、地上100mの高さも怖くなかった。

…もう少し慣れが必要かと思ってたけど、必要無いみたいだな。

俺は来て早々、レミリアのティータイム用のお菓子を買った店に入
った。

「おお、久しぶりだな。4日ぶりか？」

「おっす。今日は、個人的に買いに来た」

「あ、そうだ。お前の名前、聞いて無かったんだよな。何て言うんだ？」

「霧雨悶助。もんと呼んでくれ」

「俺は東雲戦つて言う。しがない商人だ」

戦：いい名前だな（、、）

「宜しく、戦。また訪れるだろうから、その時は頼むな」

「おう。歓迎するぜ、悶助」

そう言つて、店を後にした。

…東雲戦、か。覚えておこう。

P M 1 4 : 0 0

俺は一旦人里から出て、周りの景色を見渡してみた。

四方八方を囲む山々。
近くには、小さな川が流れていて河原で子供達が遊んでいる。
そしておいしい空気。

…あれ？ここどこだっけ？

「あー」

「……」

「あー」

「……」

「あーっ！！」

「（、、）！？」

おお、何だ何だ！？とびつくりして振り返ると…

緑色の髪に、蛇と蛙の髪飾りをしている女性。

あ、この人。

「もう、反応が遅いですよ！？」

そこには人里で以前会った女性、東風谷早苗さんが立っていた。
俺の反応が遅れたせいで、怒りに頬を赤く染めながら此方を見つめている。

「反応が遅れてごめんな。景色に見とれてたものだから…」

「全く…あ、そんなことよりも以前の話、覚えています?」

以前の話…ああ、神社に連れて行ってくれとかなんとか。

「神社に連れて行ってくれるんだっけ?」

「はい。もんさんが飛べると案内が楽なんです、飛べますか…?」

「ほうきを使えば飛べるよ」

「本当ですか!?!」

早苗さんが顔を近付けて来た。

何だろう、レミリアとは違って少しドキドキするな。

…まあ、体格的に俺と同じ年頃だからだろうけど、(・・・)

「と、とりあえず離れたらどうだ?」

「あ!?! すみません、つい…人間で飛べる人は珍しいので」

「そっか。なら神社まですぐ行けるよな」

「はい!行きましょう」

P M 1 4 : 2 8

現在、俺は妖怪の山、と言う所を飛行中。
名前の通り、物騒な山らしいです。はい

神社は、この妖怪の山の頂上にあるらしい。

…何か、山の頂上にある神社って想像出来ないな。うん

俺は、妖怪の山を地上120mまで上昇し、見渡してみた。

妖怪の山の木々は、緑色の葉から黄色の葉に色づいていて、良く見
てみると俺も確認出来た。

何て言うか、日本の秋よりも美しく見えるような気がするな。

「神社が見えてきましたよー」

「何か、大きい神社だな」

大きい神社にしては、妖怪の山と自然に溶け込んでいた。

違和感仕事しろ（、、）

「はい。注連縄がありますでしょう？あれ、1tもあるんですよ」

「ほうほう」

「それですね…」

早苗さんは、神社のことになると途端に話が弾む。

…それほど、あの神社が好きなのかな？

そうこう話しているうちに、俺達は神社の鳥居まで飛んでいた。

…何か、鳥居と言えば嫌な記憶しか無いな。

P M 1 4 : 4 7

神社の鳥居には、見慣れない女性が居た。…幻想郷の超人達の中に男は居ないのか？

「此方に霧雨悶助さん、と言う方はいらっしやいませんか？」

俺を探してるのか？

その女性に、俺は声を掛けた。

「あー」

「ひゃっ!？」

黒い翼を生やしている女性は驚いてカメラを落としてしまった。

…何か、びつくりさせちゃったな。

「あ、びつくりさせてごめんなさい。霧雨悶助なら俺です」

すると黒い翼を生やした女性は…

「あやややや、あなたが霧雨悶助さんでしたか！ 早速、あなたを
「ダメです」

「？」

「むむむ…仕方ないですね。あ、悶助さん。私の名前は射命丸文と
申します。以後お見知りおきを」

「悶助ではなく、もっと呼んで頂ければ幸いです」

「分かりました。では失礼しますねー、もんさん」

文さんは、そう言つと博麗神社の方へと飛んでいった。

…何か、天狗みたいな女性だったけど、カメラ持ってたな。
流石に幻想郷でもカメラはあることに安堵した。

「ふう… 思わぬ邪魔が入りましたね。改めてここが守矢神社、で
す」

「守矢神社か。覚えておこう」

「後この神社の神様である人を紹介しますね。ついて来て下さい」

ついに、この神社の神様と対面する時が来たようだ。

少し緊張するな…

でも

ガンキャノンとかロリ神とか言われる神様ってどんな容姿してる
んだろうなー。

見てみたい気持ちはある（、）

俺は若干好奇心を持ちながら、神社へと入って行くのだった…

17話「神々と俺」

俺は早苗さんの家に上がらせて貰った。

洋室は無く、和室が4部屋程度ある。

キッチンも整っていて、炊飯器と薪があるのが確認出来た。

…霊夢さんの神社よりも綺麗で広いな（・・・）

「広い…」

「広いですか？」

早苗さんは俺に対して疑問を持つ。

いやいや早苗さん、4DKですよ4DK。

「広いよ。俺に取っては広いさ」

「へえ… 私はあまり広く無いと思うけど…」

4DKだよ4DK。

大事なことなので（ry

「ここに神奈子様と諏訪子様がいらっしゃいます」
「ほう」

神奈子と諏訪子と言うのか。

誰と言う疑問よりは、初めて知った驚きの方が大きい。

名前から察して、ガンキャノンは神奈子さん、ロリ神は諏訪子さん

かな？

「では、開けますね」

遂に対面だ…

俺の心臓は期待と緊張が交錯し、バクバク鳴っている。

…もちつけ俺（、・・、）

P M 1 5 : 4 9

「神奈子様」 諏訪子様「紹介したい方がいらっしやいます」

「お、誰誰？」

「お、男じゃないか！早苗、あんた…」

「ちょ、違いますw」

そこには、背中に注連縄を付け赤い服を身に付けていて、胸元に鏡みたいな物を付けている人と

帽子を付け紫の服を身に付けていて、ニーソを穿いている小さな…
幼女？が居た。

「は、初めまして。霧雨悶助と言います」

「あんた、何者だい？まさか、彼氏とか言うんじゃないだろうね！？」

…彼氏て（、・・・）

威圧的な態度を取る神奈子さん。これを神の威厳と言うのか？

「だから違いますって…」

早苗さんが頬を赤く染めながら神奈子さんに対して怒る。

「悶助くんと言うのね。私は洩矢諏訪子。神よ」

諏訪子さんは神奈子さんみたいに警戒はせず、普通に接してくれた。
…神奈子さんよりは十分親しめそうだ（、・・）

「改めて俺は霧雨悶助と言います。もん、と呼んで下さい」
「もん、ね。分かったわ」

すると諏訪子さんはニコツとしながら、俺を軒先に連れて行った。
何か、話でもあるのかな？

一方、残りの二人は…

「…分かった。彼氏じゃないんだね？」

「…はい。」

早苗の説得により、神奈子の誤解は解けたようだ。

「悶助、だったね。誤解してすまなかった…って、居ない」

「さつき諏訪子様と一緒に軒先へ行きました」

「諏訪子と？…まさか、幼女趣向とかじゃ」

「もんさんはそんな人じゃありません」

P M 1 6 : 1 2

俺と諏訪子さんは軒先で二人で座っている。
話でもあるのかな？

「ふむふむ…そうかもん、か…」

諏訪子さんは一人言を喋っている。

「あの、諏訪子さん？何故俺をここに…」

「何となくだよ。男を見るのは久しぶりでさ」

久しぶりか…

人里に行けば男なんていっぱい居ると思うけどな。
ほら、戦とか居るし（・・・）

「なるほど」

「そして君に興味が沸いたのも一つ…かな」

「…答えられる範囲内なら、何でも答えますよ」

俺は無意識に諏訪子さんの頭を撫でていた。

気付いた頃には、頬を少し赤く染めて驚いている諏訪子さんが居た。

「あ、ごめんなさい… 無意識で撫でてしまいました」

「うっん、いいよ。…普通に嬉しかったし」

「え？」

「何でもないよ」

「諏訪子様ともんさん、あんなに仲良くなってる…」

「やつば幼女趣向じゃないか」

「もんさんはそういう人じゃないって何度言ったら…」

早苗さんは溜め息を付きながら二人の様子を見ている。

「早苗も仲良くなったらどうだい？彼氏とか婿は認めんが」

「諏訪子様よりは先に仲良くなってますよ。けど仲の深さは諏訪子

様に…」

「負けてると」

「はい…」

早苗さんは少し悲しそうに神奈子さんに話掛ける。

「まさか、早苗あんた悶助のこと気になってるのかい？」

「え！？　そ、そんな訳ないじゃないですかっ」

「ほほう？　さてどうかねえ…」

P M 1 8 : 2 6

俺は一通り諏訪子さんからの質問を答え、そろそろ帰ろうとしてたのだが…

「え、帰っちゃうの？」

諏訪子さんは俺の手を掴み、悲しそうな目で見つめる。

…フラン並みにかわいいなあ（、、）

「ええ、紅魔館に帰らないと怒られちゃいますので」

「…そっか。あ、今度から諏訪子、って呼んで。いいから「分かりました」

「あ、もんさん。お帰りですか？」

早苗さんと神奈子さんが、俺を見送りに来てくれたようだ。

「うん、もう帰らないと」

「あー…悶助。さつきはすまなかつたね」

神奈子さんが申し訳無さそうに話掛けてきた。

「気にしていませんよ。後、もんと呼んで頂ければ幸いです」

「分かったよ。後自己紹介が遅れたね、私の名前は八坂神奈子だ」

「改めて霧雨悶助です。」

「ご飯とか食べていかないかい？」

「いえ、帰らないと怒られるので、遠慮させて頂きます」

「それは仕方ないね」

「あ、もんさん！…また、来てくれますか？」

「うん、近いうちにまた来させて貰うよ。それじゃ、さようなら」

今度は、ご飯食べさせて貰おうかな？

三人に見送られながら、俺は帰って行った。

俺は今、紅魔館の三階に潜伏中。

咲夜さんとかレミリアとかフランとかに見つかったら…

「あ！？ 前の侵入者！」

「待て待て（。 。 ;） もう俺はここに住むことになったんだよ」

妖精メイドは警戒を緩めない。

…勘弁してくれよ（、 ; ; ;）

「何事よ…ってもん。いつの間に帰ってたの？」

（。 。 ）！？

うう、バッドタイミング。

不幸だ。

「今さっき…です。」

「妹様とお嬢様がかなり怒ってたわよ。無論、私も（^ ^ #）」

「うわああああ（、 ; ; ;）」

「あっ！？ 居た！ もん、遅い！！！」

そこにフランもやって来た。

おいおい、マジで勘弁してくれよ。

「フラン、これには訳があつてだな…」

「…いいから、謝って。」

フランは鬼のような形相で俺を睨む。

…レミリアよりも怖い（、 . . .）

「ごめん…なさい（、・・・）」

「妹様、今日はどうなさいますか」

「うーん… 気が済むまで遊んで貰おうかな」

次からは、ちゃんと夕方に帰ろう。
そうしよう。

そう心から思う日であった。

18話「白玉楼の住人」

AM 8 : 47

いつも通りの朝。

俺は紅魔館で今日も通常業務をしていた。

「あ、もん。あなたに話したいことがあるのよ」

何だろう、レミリアを久しぶりに見た気がする。

俺は久しぶり？だったのでレミリアをしばらく凝視していたが…

「…？ 何よ、もん。じろじろ見て」

「え？あ、すみません。お話があるんでしたね」

「そ。ほら、早く行くわよ」

俺の手を掴み、少し早歩きで歩くレミリア。

…手繋ぐことは、抵抗無いのな（・・、）

「さて…もん。あなたに行って欲しい場所があるわ」
「何でしょう？」
「白玉楼に行って欲しいの。案内は咲夜がしてくれるから、大丈夫よ」

白玉楼？

どんな所なのだろうか。

悶助は若干気になりながらも、レミリアの願いを了承する。

「ええ、分かりました。行きます」

「…ありがとう。」

レミリアは俺に笑みを見せる。

フランと言い諏訪子と言いレミリアと言い、やっぱり三人とも可愛いなあ（*´、*´）

「お嬢様の頼みですから、引き受けるしかありませんよ」

「あら、なら何故吸血は引き受けないのかしら？」

やっぱり来ましたこのパターン。

俺は慣れてきたので速攻で言い返す。

「それとこれとは話が違います（´・・´）」

「な、何よそれ！？ 私の頼みなら何でも引き受けるんでしょ！」

う、自分の失言が痛い。

悶助はめんどくさくなると思い、レミリアの元から足早に去った。

「あ！？ 逃げるのね？ ふふふ、いいわよ。今日の夜覚悟してなさい！」

俺は食事を取った後、咲夜さんの元へと急いだ。

「咲夜さんー 大事なお話があるんですが」

「……………」

咲夜さんは答えない。どうしたんだろ？

俺は何かあったのかと思い、開いていた部屋に入る。

「咲夜さ…っ (。 。) ! ?」

そこには、まだ下着の状態でメイド服にお着替え中の咲夜さんの姿が。

スタイル抜群ですな。これは素晴らしい

「………… THE WORLD。時よ止まれ」

幻葬…

夜霧の幻影殺人鬼!!!!

P M 1 2 : 5 6

俺はボロボロの状態で正座させられている。

…俺も悪いけど、咲夜さん何で答えなかったんですか（、・・・）

「…謝らないとまたボコるわよ」

「ごめんなさいマジごめんなさい（、・・・）」

「はぁ…で、何の用なのよ？」

咲夜さんは呆れた様子で此方を見ているが、頬を真っ赤に染めているのは気のせい…じゃないな。

下着を見られたからそりゃ恥ずかしいよな、と思いながらも俺は本題に移す。

「はい、お嬢様のお願いで白玉楼に連れて行って欲しいんですが」

「お嬢様のお願ひ？…分かったわ。連れて行ってあげる」

……

P M 1 3 : 2 9

咲夜さんは、時間を止めて俺を白玉楼まで連れて行ってくれたようだ。

咲夜さん、ありがとう。後ほんとごめん（．．．）

辺りは、白い霧で包まれていて目の前には門が見えた。
それにしても、随分と寒い場所に来たもんだとしみじみ感じる。

「あ、普通に開いた… お邪魔します（．．．）」

門は開いていた。

重そうな門だったのに、いとも簡単に動かしてしまった。

… 実は軽かったりするのか？

慎重に入って行くと、地面はやがて砂利道へと変わった。
霧も門を閉めると無くなり、辺りを見渡そうとした刹那。

俺の頬に、鋭く尖った感覚の痛みが走った。
何者だ？ 剣でも持ってるのかな。

俺は警戒を強め、スペルカードを用意する。

「私の剣に、斬れないものなどあまりない！」

…どこから聞こえて来るんだ？

警戒を強めるが、辺りには誰も人は確認できない。

……分からないから正面でいいよね！

溜符…

かめはめ波！！

P M 1 3 : 4 5

目を開くと、また見慣れない天井。
俺、最後何してたんだっけ？

「あら、起きたわね」

そこには、@が付いた帽子に、桃色の美しい服を身に付けている女

性が座っていた。

後ろには、魂が幾つかふよふよと浮遊している。

…この女性、亡霊か？

「あの、俺は一体…」

「妖夢と相打ちになったのよ」

…妖夢？

誰だ？まさか、あの門の付近で戦った…

てか、俺死んだかと思ってた（．．．）

本当に正面から突っ込んで来るとは思いもしなかったが、生きていることにとりあえず安堵した。

「幽々子様？ 何故侵入者を保護したのですか？」

すると、白髪で緑色の服を身に付け、剣を二つ帯刀している少女が俺を睨みつけながら入って来た。

服の部分部分に穴が開いていて、髪もぼさぼさになっていた。

…俺、この女性にかめはめ波撃ったのかな？

「あ、紹介が遅れたわね、私は西行寺幽々子。亡霊よ こっちが魂魄妖夢って言う半人半霊で半人前の剣士なの」

侵入者の俺に、優しく紹介までしてくれる幽々子さん。

…亡霊で、優しいのかな？

「幽々子さんと妖夢さんですね。俺は霧雨悶助と言います、もんと呼んで下さい」

「無視しないで下さい」 もう…あ、その人間」

半人前の剣士と言う少女が、此方に近づいて来る。

「何ですか？」

「もんと言ったな？侵入したからにはここで斬って成敗してくれる！」

えええええ！？（。。；）

俺の人生ここでオワタですか。そうですか。いやいや、ここで死にたくないっす。

「あ、よーむ。もんに危害加えちゃダメよ、決闘なら今やらせるから」

幽々子さんがひょっこり出てきてくれたお陰で、命拾いした…でも、最後の言葉は聞き捨てならないぞ、おい（・・・）

「決闘をやるのはいいですが… 私が絶対勝ちますよ？」
「分からないわよ」 この子、何か力を持つてるもの」

幽々子には見えたのだ。

… 悶助の体から魔力が溢れんばかりに流れているのが。

「能力なら一応… 魔法と空間を操る能力がありますが」

空想上のものを実体化する能力もあるが、あえて言わないでおいた。

「あらあら、よーむより格段に強いわよ」

「だ、大丈夫です！ たかが人間ごときに、私が負けてなるものですか！」

決闘をする前に、俺と妖夢は刀がしまつてある倉庫へ向かっていた。
武器を貸してくれるとのことだったが…

「…これは？」

「分かりませんか？ 刀ですよ」

妖夢は溜め息をつきながら話掛ける。

「いや、刀なのは分かるけど」

妖夢に対しては何故かタメ語で話してしまう為、タメ語で話すことにした。

「刀も持たないと決闘ではありませんからね」

…ティアドアウナーとか持つてくれば良かったなあ。

悶助は少し痛いことをしたと後悔する。

しかし、鉄刀も嫌いじゃないのは事実だ。

このシンプルなデザインが…イイ！（、・・）

「…何ぼうつとしてるんですか？ 行きますよ」

「あ、うん」

俺は、妖夢と決闘と言う名の死合いをすることになった。

19話「剣士と剣士」

妖夢から鉄刀を貸してもらった俺は、決闘をする裏庭へと向かっている。

途中、妖夢の様子を窺うと表情は堅く真剣なものだった。
真剣なのは十分伝わるが、その…背が小さいから子供っぽく見えるのだ。

相手は素人じゃないのは分かってはいるんだけどね（．．．）

「…何ですか？その子供を見るような眼差しは」

「え？ああ、妖夢がそう見えたのならごめんな」

急に話し掛けられたが何とか取り繕うことは出来た。ふう…

「幽々子様を連れて来ますので待ってて下さい」

裏庭に着いて早々、妖夢はそう言々と表庭の方へと姿を消していた。

裏庭を見渡すと、表庭の3倍程度の広さがあった。
土には雑草が抜かれた痕が残っている。一応、手入れはしていることとは分かるのだが…

…門の手前より寒いような気がしないでもない。

幻想入りした日は確か冬の寒い日だったな。幻想郷も冬なのかな？

「お待たせしました」

「お待たせ」

そこへ幽々子さんと妖夢が帰って来た。

とりあえず、今日は何月何日か聞いてみよう。

「あの、一つ聞きたいことがあるんですが」

幽々子「なーに？」

悶助「今日って何月何日ですか」

「12月26日だったわよねー 妖夢？」

「はい、その通りでございます」

…やはりか。

俺は幻想郷でも冬だと知り落胆する。

こんな寒い所で、決闘なんて何を考えているんだ…（、、）

妖夢は半袖にスカートで、大丈夫なのだろうか？

妖夢は身震い一つもせずただ平然と立っている。

「私と妖夢は霊だから冬でも寒くないのよ」

「そ、そうですか。安心しました」

心を見事に読む幽々子さん。

表情に出てるのか？それとも本当に心を読めているのか？

…多分、前者だろうな（、、、）

「それよりも、早く始めましょうよ。決闘」
「そうですね。では、位置について下さいもんさん」
「分かった」

P M 1 4 : 3 0

妖夢と俺は定位置に付き、お互いの距離も一定にした。
俺は寒さに身震いしながらも、鈍く光る鋼の刀を抜く。

重さはデュエルソード並で振れる分には振れる。

俺よりも双刀を抜き構えている妖夢は大丈夫なのだろうか？
双刀となると、重さも伴ってくるはずだが…

「妖夢」

「何ですか？」

「重くないのか？ その刀」

「ああ、刀ですか。二つで5 k gですから全然軽いですよ」

…え？5 k g？

いやいや妖夢さん、それは全然軽くないでs

「妖夢は普通の人間よりは力持ちだから大丈夫よ」

「心配する必要は無かったみたいですね」

「それよりも早く、早く。」

「では…魂魄妖夢、いざ参ります！」

先手は妖夢だ。

妖夢は高速で間合いを詰め、距離を一気に縮めて行く。

一方、俺は防御体勢に入った。

高速で一氣に間合いを詰められては、対策をすぐに練られないからだ。

「後は…受け止めるだけだ」

ガキン！！！！

刀と刀の衝撃が、裏庭に響き渡る。

「あらあら、妖夢の一撃を受け止めるなんてやるわね」

あくまで人間としてはやると言う意味だが、幽々子は感心する。

「感心するなんて珍しいわね、幽々子？」

そこに隙間妖怪こと八雲紫も見物人として俺たちの決闘を見に来たようだ。

「まあね、あの子の能力は桁外れだから」

「流石は私の子だわ」

「え、紫が取ってたの？あの子」

「ん… まあね」

「受け止めるとは… 人間としてはやるようですね！」

「それは…どうも。」

刀と刀はまだギリギリと犇めき合っている。

何だ、この今までに無い重い衝撃は。

今にも寒さに手が凍りつきそうだと言うのに、これはまずい状況だ。

「それでは…これはどうでしょう！」

妖夢は再び定位置に戻った後、意識を集中し始めた。

一体、何が起こるんだ…？

「妖夢はスペカを使う気ね」

「スペカに頼る所がまだまだ半人前なのよ」

「そうね。妖夢相手だし悶助くんも勝機は十分にあるでしょう」

「はっ！！」

妖夢は俺との距離を少し縮め、そして…

人符…

現世斬！！

妖夢の刀の一つが緑色の鋭い刃へと変わり、俺目掛けて振り下ろして来た。

「ちよっ！？ いきなり過ぎるだろ（。・。・）」

ただ、直線的に刀を振り下ろして来たので容易に避けることが出来た。

斜めに振り下ろして来たら、俺は攻撃を喰らっていただろう。

「くっ… スペカまで避けるとは」

「さっきのはまぐれだよ」

「ですが… 次は逃がしませんよ」

人智剣…

天女返し！！

妖夢は一回垂直に刀で斬ったかと思うと…

更に下から上に刀を斬り返して、俺の方目掛けて鋭い刀の刃が襲って来た。

「こんなのアリかよ…」

俺は予想して無かった事態に全く動けず、もろに攻撃を喰らってしまった。

脇腹と左腕の一部を負傷し、俺は跪く。

脇腹は皮膚を切り裂き、やがて血がポタポタと滴り落ちる。
左手は酷く、真皮の付近まで傷が食い込んでいる。

痛みを越える、想像を絶する痛みである。

「決まったようですね」

「…そのよう…だな」

「では…これで終わりにしてあげます」

「やっぱり、無理があつたかしら」

「いや、悶助くんはこれから力を発揮するわ。良く見ときなさい」

「まだ…諦めた訳じゃない」

「命乞いをするなら今ですよ」

「…すまないが、断固拒否する」

「何を　っ！！？」

悶助の鉄刀が突然変異を起こし、光に包まれていく。

妖夢はこんなことが起きるのか、と言いたそうな驚きの目をしてい

る。

何なんだ、これ（．．．）

突然変異が終わり、刀を確認してみる。

刀は鉄刀よりも少し長くなり、鞘は青色に変化していた。

試しに、不意打ちと称して妖夢目掛けて斬る。

シュピン…

P M 1 6 : 4 7

俺は何故か布団で再び寝ている。

あれ、俺何してたんだっけ。

決闘だったよな？負けたのか？それとも…

「起きた？もう…一時間も寝てたのよ？」

紫さんの声が、後ろから聞こえてくるのだが…

「何で同じ布団で寝てるんですか」

「私の子だから当たり前でしょ？」
「さいですか」

俺は紫さんの発言を軽く流した。
だって、頭痛いし腹痛いし（ry

「軽く流すなんて酷いわね」
「今頭とお腹が痛いので、とても話せな…」
「えいつ」

紫さんは俺の発言を無視して思いっきり抱きついて来た。

嬉しいけど、抱き締める力が強いなの…
胸やべえ（＊、＊）なんて言ってる場合じゃない。

「あら…少し、力が強すぎたわね」

紫さんは、力を緩め優しく抱き締める。
暖かくて、眠りそう…

「出来れば、離れて欲しいんですが…」

このまま眠ったら幽々子さんや紫さんに迷惑を掛けるので、離れる
よう懇願する。

「話はすぐ終わるから、このままで話をさせてもらっわ」

すぐ終わるなら、と俺は耳を傾ける。

「あの鉄刀のことなんだけど… あなたにしか扱えない代物になっちゃったから、持ち帰ってくれない？」

「？ あの刀がどうかしたんですか？」

「ええ。空間を斬る刀、まさしく「空間刀」に突然変異したのよ。何故かは知らないけど」

空間刀？

あの鉄刀が突然変異した時に出来た刀か。

とりあえず、すごい刀貰うことになるんだな俺（＊、＊）

「はあ。分かりました。では…俺、帰り…ま…す………」

ダメだ、眠気が…

俺はそこで意識を落とした。

20話「出会いと再会」

12月26日

PM 21:51

俺は目を覚ました。

ここはどこだ？ 見覚えのある部屋に見えるが…
紅い洋風の壁に…って。

いつの間に俺は紅魔館に帰ってたんだ（・・・）？

まあ、帰れたから良しとするか。

…しかし、白玉楼での一戦を終えた後は、殆ど記憶が無い。
残つてるとすれば、紫さんの中で眠ってしまったことだけだ。

「起きたわね。具合はどう？ 左手が酷かったけど…」

首を横に向けると、そこに心配そうに見つめる咲夜さんが居た。

「左手はまだ痛みますが、他は大丈夫ですよ。体調も悪くありません」

左手は真皮まで剥けたこともあって仕方が無い。

わき腹は…切り傷程度で済んだみたいで、傷口は瘡蓋が早くも付いていた。

「そう。左手以外は痛くないのね？」

「はい。この通りです」

俺は足や右手を前後に動かした。

「良かった…」

咲夜さんの様子を見ると、本気で心配していたことが伺えた。

…嬉しいんだけど、何か妻が怪我した夫を見舞いに来ている感じだな。

「心配掛けてすみません。本気で心配してくれてたんですね」

「家族だから、当たり前でしょ？」

そうか。咲夜さんも、俺を家族として認めてくれてたんだな。

「家族、か…」

「…あ。そうそう、紫から伝言があつたんだわ」

「え、紫さんから？」

「ええ。言い忘れてたけど何であなたがここで寝てるかは、あなたをここまで運んで来てくれたからよ。紫がね」

そうか、紫さんがわざわざ俺をここまで…

紫さんありがとう（、；、；、）

「…それで、伝言とは？」

「少し長くなるけどいいわね？」

少女説明中…

本当に長かったので要約してみた

- ・妖夢に勝った
- ・妖夢がリベンジしたいらしい
- ・空間刀貰った
- ・幽々子さん「また来てね」
- ・血祭りに上げてやる
- ・キングクリームゾン！
- ・紫さん「今度うちに遊びに来なさいな」
- ・汚ねえ花火だ…
- ・よろしい、ならば戦争だ

…何か、ネタが入り乱れてて伝言が（．．．）
とりあえず明日白玉楼へ向かおうか。人里にも行こう。うん

「今日から3日はゆっくり休みなさい。どこか逝くなら逝けばいいわ」

あの、行くと言う言葉が違つような気が…

「あ、ありがとうございます」
「んじゃ、失礼するわ」

咲夜さんはその場から一瞬で消えた。
俺も、瞬間移動とか出来れば妖夢にも…！（・・・）

P M 2 3 : 2 0

少し遅めのお風呂。

左手を袋で覆い、お湯に浸からないように注意する。

お風呂は、街の銭湯並みの広さがあった。

サウナは流石に無いか。

勿論、ジャグジーも無いし掛け湯も無かったが、十分だった。

「うほw w 気持ちいいなおいw」

温泉でも引いてるのだろうか？

幻想郷でも引ける所は有りそうだが…

ボタン！！！！

(。。。)…!!?」

「わぁーい、お風呂 お風呂」

「妹様、お風呂では暴れないように…。(。。。)!!?」
「いつもよりちょっと遅めのお風呂ね…って」

悶助「えっ」

何故入って来たし。

やばい、咲夜さんに殺られるな。いい人生ダッタナー

「あれ？もんもお風呂？」

「…THE WORLD」

「止めなさい咲夜」

「あう…」

パチュリーさんマジ神。

パチュリーさんのおかげでまだ生きれる…！

「すみません、俺もう出ますんで許してください」

「いや、出なくていいわ」

…え？

俺は、一瞬身が固まった。

これは、混浴って言うんだっけ。初体験ですな（．．．）

「出たらアグニシャインで身体燃やすわよ」

ひえええ（．．．）

何てことを言うんだこのもやし…いや、紫もやし。

「…何か失礼なこと考えなかった？」

「考えてませんよ」

「パチユリー様、流石にそれは…」

「私はもんと話したいだけよ」

「パチエの話終わったら私に貸してね」

「いいわよ」

俺は物扱いか。

こうして、紅魔館の夜は更けて行くのであった…

（俺がフランの手に渡ってからどうなったかはご想像にお任せします）

12月27日 晴れ

AM 10:29

今日は遅めの起床。

休みなので早速人里へ…と思ったのだが

「あら、どこかお出掛け？」

レミリアさんおっすおっす。

「ええ。人里と白玉楼へ行こうかと」

「（また人里…何があるって言うの？）」

「あの…お嬢様？」

「し、仕事はどうしたのよ！まさか、サボるとかじゃ」

「咲夜さんに聞けば分かりますよ。」

俺は着替えをしながらレミリアに話す。

あれ、咲夜さんから話聞いてないのかな？

「咲夜ー！咲夜ー？」

レミリアが探しているうちに、俺は空間刀を持って空へと飛んだ。

AM 11:02

人里へ到着。

早速、あの場所へ向かう。

「おつす戦ー」

「久しぶりだな！悶助よ」

「あれ、品数増えた？」

そこには、フ ラムネやポツ ーなどが所せましと並んで居た。
現代のお菓子だと！？

これは買い占めるしかない…って、お金に難があつたな。

「うちの娘が守矢の姉ちゃんから貰つたんだとよ」

「ああ… 早苗さんか」

早苗さんなら理にかなう。現代っ子だからなー

「買つて行くか？」

「んじゃ、ポツ ー5箱頂戴」

「はい、1円な」

1円？

1円で。この時代の一円って一体何円なんだ。

「1円持つてないんだ。5円でいいか？釣りはいらなぞ」

「マジか！！？」

戦が目を光らせて俺に言う。

そんなに価値あるなら、100円持つてるだけで大金持ちだなおい。

「ああ。んじゃ、じゃあな戦」

「恩に着るぜ悶助！！」

こんなに感謝されるとは思っても無かったな。

P M 1 2 : 0 6

暫く白玉楼の道を進んでいると…

「人間か？白玉楼は危ないから気を付けろよ」

そこに、白色の長い髪で、赤色のオーバーオールを穿いている女性が居た。

「あなたは？」

「藤原妹紅。蓬萊人さ」

妹紅さんと言うらしい。蓬萊人で、かぐや姫と同じか。後、不老不死だっけ。

「俺は霧雨悶助と言います。もん、と呼んで頂ければ」
「もん、か。分かった。また会った時にはよろしくな」
「はい、よろしくです」

そう俺が言くと妹紅さんは、竹林の方へと去っていった。また会った時は、色々聞いてみたいなー（＊、＊）

P M 1 2 : 1 4

俺は白玉楼へ着いた。

妖夢に斬られる可能性があるので、空間刀を構え慎重に入る。

「警戒しないでいいわよ」 妖夢なら庭に居るから」

幽々子さんが、俺の警戒を解くように出迎えてくれた。
とりあえず、一安心だな…

「以前の決闘では熱くなつてしまい、すみませんでした」

部屋に入ると、深々と頭を下げる妖夢が。

俺、こういうの慣れてないぞ（´・・・`）

「いやいや、もういいよ。頭を上げてくれ」

「どうぞ、私に罰を…」

このままでは埒が開かない。はあ、仕方ないな…

「え…？」

俺は妖夢の頭を優しく撫でる。

説得よりは行動する方が早いと思ったからだ。

「妖夢ってあだ名とか無いんですか？」

「そうねー みよん、とか呼んでたような気がするわ」

「幽々子様… あう」

妖夢は頬を赤く染める。本当、子供みたいだな。

「んじゃ、みよんでいいか？」

「え！？ は、はい…」

渋々了解、と言った所のようだ。みよん、か。いいあだ名だ。

「では、帰ります」

「え、もうですか？」

「もう少し居ても良かったのにね」

「もう少し居たかったです…すみません」

まあ、これと言って急いでは無いのだが…

また決闘は避けたいので早めに帰ることにしたのだ。

「…また、来て下さいね」

「今度は妖夢が料理作って待ってるわよ」

「マジですか（、・・・）楽しみにしていますね。では…これにて」

妖夢と幽々子さんに見送られながら、俺は白玉楼を後にした。

妖夢の料理、楽しみだなー（*・・*）

P M 1 5 : 4 0

漸く人里に着き、また戦の所へ向かおうとしたのだが…

「あ、お久しぶりですもんさん」

「おー 早苗さんに…諏訪子？」

何日ぶりか分からないが、早苗さんと諏訪子に再会した。

買い物に来たのかなと思っていると…

「やあ、久しぶりだね」

諏訪子が、俺の腕を掴んで腕組みをする。

早苗さんは、何か思考停止してるな…大丈夫か？（、・・、）

「だ、大丈夫ですよ。羨ましくありません」

「バレバレだよ」

「何が？」

「何でもありません！」

早苗さんは、神社の方へ少し焦りながら飛んで行った。

何か、怒ってたような気がする…今度、謝ろう。

「あーあ、行っちゃったよ…でも、これで二人つきりだね？」

「そ、そうですね」

人里の中心だったので、人々の注目を浴びる。

諏訪子は、何をする気なんだろう（、・・、）

「デート」

「ええ！？」

「冗談だよ冗談。」

あの、冗談の目じゃないんですが。

そう思った理由は、諏訪子の瞳が真剣そのものだったからだ。

「お、俺帰ります！（；、、）」

これはマジだ。

逃げるしか無い。

俺は魔力を使って空に飛び上がり、博麗神社へと飛んで行くのであった…

「あー、行っちゃった。…でも何か、あの子達っのよね。他の人と」

21話「魔法使い達の集い」(前書き)

アクセス30000PV越えたかな？

見てくれる人には感謝、感謝。(＊、＊)

21話「魔法使い達の集い」

AM 10:01

今日は12月28日…だっけ。多分12月28日です。

大晦日まで後3日…

幻想郷の超人達は、大晦日と言うものを知ってるのだろうか？

俺は布団を片付けようと起き上がった。

が…

「さ、寒っ！うー、布団布団（、・・・）」

昨日は暖かったのにな。

妙に寒いので、早く布団に入りたい気持ちを抑えて窓を開けてみると…

一面銀世界。

つまり、大雪である。

なるほど、大雪なら道理で寒い訳だ。

日によって、寒暖の差が激しいのは幻想郷でも同じのようだ…

でも、大雪でも門番をしている本みりんさんが心配だな。

俺は、後で本みりんさんに会うことにした。

紅魔館の大時計は11時を指している。

大雪なので、気温は上がる筈も無く外からの冷気がひしひしと伝わった。

「あの、本みりんさん」

「……………」

本みりんさんの元へ向かった俺は今門に居るのだが…

寝ている。

こんな大雪でも寝ているのだ。

おいおい…と衝撃的だったのはさて置き

これは風邪を引くな、と思った俺は本みりんさんを本館へと連れて行った。

……

「あれ、此処は…」

「起きましたか？本みりんさん」

本みりんさんは幸い風邪を引いておらず、俺は一つため息を付いた。

「本みりんじゃありません！紅^{ほん} 美鈴^{めいりん}です！！」

本みりんではなく、めーりんさんと言うようだ。

何か、誤解してたようで悪いな（・・）

「ごめん、漢字の読みが分からなくて…」

「あー、そういうことですか。では、これからは美鈴と呼んで下さいね」

美鈴は俺に優しく微笑みかける。

「ああ。…そういえば、俺の名前を覚えてなかったな。俺は霧雨悶助だ」

「はい、それでは悶助さんでいいですか？」

「もん、でいいよ」

霊夢さんに付けて貰った渾名　　。

初めて付けて貰った渾名は、呼んで欲しくて堪らない。

こういう時は、呼んで欲しくてつい笑顔になってしまう。

「は、はい。もんさんでいいですか？」

「うん、頼むよ」

「もんさん…嬉しそうな顔してますね」

「霊夢さんに初めて付けて貰った渾名なんだ。だから…」

何だろう、めーりと居ると落ち着く。

本音を言える気持ちになるのだ。

物腰柔らかな雰囲気だからだろうか…？

俺は、久しぶりに落ち着けたせいか、しばしの眠りに付いた…

P M 1 3 : 2 4

「起きた？」

俺は仮眠をして起床。

周りを見渡すと本棚がある。ここは図書館だ、と判断は付いた。

膝枕をしてくれてるのは…パチユリーさん？

「パチユリーさん？」

「起きたのね。それじゃ、外に出るわよ」

外？

大雪の中外出るなんて、パチユリーさんの気がしれないな…

あ、美鈴はどこに行っただろう？

「美鈴を気にしてくれてたのね。あの子は風邪を引かないから大丈夫よ」

パチュリーさんが察してくれたようで、クスツと俺に微笑む。

めーりんと言い、パチュリーさんと言い…

笑うとかわいいじゃないか。(´、´)

とりあえず、風邪を引かない身体と分かった俺は安堵した。

「で、外に出るって…」

「外出なんて珍しいこと。どこへ行くのかしら？」

そこへレミリアと咲夜さんがやってきた。

二人ともコートを着ていて、防寒対策をしているようだ。

「魔理沙の家よ。もんと魔理沙、関係ありそうだから」

魔理沙のことを思い出した、とは言わず黙っておいた。

ここで話すよりは、行ってから話した方が吉だ。

「気を付けて行ってらっしゃいませ、もんとパチュリー様」

咲夜さんが少し心配そうな顔で俺達に話掛ける。

「ええ、行つて来るわ」

「心配しなくて大丈夫ですよ。魔理沙の家に行くだけですから」

「早く帰って来なさいよ！遅かったら…分かつてるわね？」

「は、はい…。(。川)」

レミリアよりも最近はフランが脅威だけだな。

俺は早く帰る、と心に念じて魔法の森へと飛んで行った。

P M 1 4 : 0 9

俺達は魔理沙の家に到着した。

家から誰かと誰かの話声が聞こえて来る。

聞き覚えのある声だな…この声は

「「アリスか…」」

パチュリーさんと声が重なった。

パチュリーさんは、アリスとは親しいのかな？

「あら。アリスを知ってるのかしら？」

「はい。以前お世話になった人で」

「そう」

パチュリーさんはドアノブを思い切り回して、一気にドアを開けた。

「おうパチュリー。丁度いい所に来たな……っ！？」

「おつす魔理沙！遊びに来たぜ」

「お、おう兄貴…来てくれたんだな／＼」

魔理沙の家は散らかっていて整っていない状態だった。

汚いな、とは思うが勝手に掃除するのは魔理沙に迷惑なのでやめておいた。

「私達は遊び目的で来た訳じゃないけどね」

「あら、もん！久しぶりね」

「アリス、久しぶりだな」

アリスの顔を見るのは久しぶりに見える。

一週間くらいは会ってなかったような気がするが…

「前の約束、覚えてる？」

「ああ、また会ったら弾幕勝負…だっけ？」

「大体合ってるわ」

アリスは俺に小さく笑みを零す。

覚えていたことが、嬉しかったんだろうな。

……

「突然だが、兄貴は魔法使えるか？」

魔理沙が突然、俺に問い質してきた。

魔法が使えるか否かと言われれば使えるが…

魔理沙は何も能力云々を知らないから仕方ないか。

「もんは魔法使えるわよ。魔力は魔理沙の約5倍はあるし」

「5、5倍…！！！？」

アリスと魔理沙は口を揃えて驚愕している。

俺は100000以上はあったはずだから、驚くのも無理は無いな。

「魔力100000ですって…！？」

「あつ、兄貴。魔力100000で人間か！？」

魔理沙にもお前人間かと疑われた。

俺、身体は普通の現代人だぞ（；；；）

「人間だよ。身体はね」

表情は落ち着いているが、心は少しだけ荒む。

能力だけはチートであって、他の分野では人並みのレベルだと言うことをこの三人は分かっているのかな…

「そういえば、もんの能力を聞いて無かったわね」

「お、今日の本題だな！パチュリー、兄貴の能力を頼む」

本題って…

俺の能力を知る為だけに俺達を呼んだのか？

まあ暇だからいいけど（´・・・`）

「…魔法と空間を操る程度の能力よ」

「空間？隙間が操れるのか？」

「多分操れると思う。一応、空間を斬ることも出来るよ」

「こんな能力、チート過ぎるわ…」

「返っていいじゃないか。兄貴の能力が強かったら大きな力になる
と思ってたんだし」

大きな力？

話が読めない…

理解出来ないまま、俺は三人の会話を黙って聞いていた。

「んじゃ、行こうか。」

三人は話を終えた後、どこかに行く準備をし始めた。

あの、こんな寒い日にどこ行くんですか。（´・・・`）

「どこに行くんだ？」

「
「
「
魔界^{だぜ}
」
」
」

21話「魔法使い達の集い」（後書き）

魔界に行きます。

かなり遅れましたが、オリジナルキャラクターの紹介をしたいと思います（・・・）

きりさめもんすけ
霧雨悶助

1993年12月25日生まれ（15歳）

身長：165cm

体重：52kg

趣味：ネットと野球

血液型：B型

眼色：黒色

髪色：黄土色っぽい

備考

魔法と空間を操る程度の能力^{チート}

魔力を100000以上持っている

剣に目覚めた？

受験生の中学三年生。

両親は離婚、妹を突然無くし、終いには母親に公園に捨てられると言った絶望的な幼少期を過ごした。

霧雨魔理沙の兄。

魔理沙は紫の神隠しにより4歳の頃に幻想入りした。

性格は優しく、怒ることは滅多に無い。

施設の女性に好かれていたようだが、本人は気付いていない。
裏表が無いかはまだ未明。

しのめいくさ
東雲戦

4月22日生まれ

年齢：29歳

身長：178cm

体重：69kg

趣味：商売

眼色：青色

髪色：灰色

血液型：O型

備考

人里で商売をやっている。

悶助と仲がよい。

格闘の達人だとか何だとか

能力は不明。

調べればあるかもしれない

現在29歳独身の商売人。

主に西洋や洋風の商品を販売しており、経営は決して楽では無いようだ。

ルックスは普通にかっこいい。目元が少しキリッとしていて男らしい顔である。

女性には比較的モテるが、まだ結婚を考えていないようだ。

性格は大胆で素直。喜ぶ時は喜び、悲しい時は悲しくなりと単純。

ムードメーカーでもある。

【番外編】東方×B B 2話

……

霊夢達は何かの施設に隙間から飛び降りた。

「何ここ？」

「何かの施設みたいだな」

「あ、誰か来ますよ！」

「ん…お前ら誰だ？」

「奇抜な服装をしているな」

霊夢達の目に映ったのは、20代くらいの短髪の男と、40代くらいの…おっさんが居た。

「おっさんとは何だ。まだまだ現役だぞ」

「…あなた達は誰ですか？」

「俺はレオ。レオと呼んでくれ」

「俺はゴードンだ。ゴードンで頼む」

「私は博麗霊夢よ。霊夢でいいわ。それで、ここは何なの？」

「付いて来い、案内してやる」

P M 1 3 : 0 0

「何よ、このでっかい部屋は」

レミリアが、驚いた顔をするのも無理は無かった。

タッチ操作で司令を下すと思われる機械に、総員30名でコンピーターを使って何らかの管理をしている。

宇宙戦争でもしてるのだろうか？

まさか、ガンムの世界に入ったんじゃない…

「戦争でもしてるの？」

霊夢ら全員は、レオ達に問い詰めた。

「良く分かったな。ニユードと言う物質を取り合う…」

「レオ、話すのは後だ。まずはあの人に霊夢達を会わせようじゃないか」

「そうだな。んじゃ、付いて来い」

………

「あなたは…霊夢と言つのね」

黄緑色のすらつとした髪を揺らす女性は、霊夢に話掛けた。
黒ニーソを穿いていて、手元には書類を持っている。

「見ちゃダメ」て何よ…（、・・・、）

「ええ。あなたは？」

「フィオナよ。この施設の管理者みたいなものね」

「要は一番偉いのね」

「まとめてくれてありがとう。今から、ここについて話すわ」

P M 1 3 : 4 5

「んじゃ、ここについて話すわね」

「頼むわ」

「ここはマグメルって言う民間軍事会社よ。主にボーダーを幹旋している所なの」

「ボーダーとは何故でなにゆえしょうか」

咲夜が、理解し難い顔で問い掛ける。

「ボーダーとは、ブラスト・ランナーと言うロボットを操作する人のことよ。最近は、人手不足で困ってて大募集中なの」
「私達にも操作出来るんですか？」

ロボットと聞いて目を輝かせる早苗。
すごく…眩しいです。

「ニユードと言う物質に耐えられる身体なら大丈夫よ。検査してみ
る？」

「はい！」

「ちよつと早苗。何勝手に了承してんのよ」

「いいじゃないですか。しばらく帰れないんですし」

「山の巫女と同じく、検査してみたいわね。面白そうだし」

「しばらく帰れないんだし、この巫女の言うとおり検査すればいい
じゃない」

永淋やレミリアは、ブラスト・ランナーに興味があるようだ。

他のメンバーも、特別興味が無い訳では無い顔だった。

霊夢は仕方無いわね、と仕方無しに了承した。

……

「検査結果が出たわ」

「…じくり。」

早苗は未だに目を輝かせている。
特に関心を持っている永淋とレミリアは、やはり期待しているようだ。

「操作は出来る身体なんだけど…ニユードを摂取する必要の無い身体と言うのは特殊ね」

「ニユードって何？美味しいの？」

幽々子が、ニユードを食べ物と勘違いしているようだ。

「美味しくないわよ。強い毒を持つてるから」

「何だ、毒なんて摂取したら死ぬんじゃないのか？」

「ニユード耐性者はニユードを摂取しないと戦場で生きられないのよ」

「私達はニユードを摂取しなくてもブラスト・ランナーを操作出来るんですね？」

「そう。あなた達みたいな人は初めて見たけどね」

「それよりも、ブラスト・ランナーを見せて下さい！」

「いいわよ。ただ、一つお願いがあるの」

「…何よ？」

霊夢が眉間にシワを寄せてフィオナを睨みつける。

「このマグメルに、社員として入って貰えるならいいわよ」

【番外編】東方×BB 2話（後書き）

ニユードとは

自己増殖性があり、資源枯渇問題の救世主とも言える素材。

BBは、このニユードを巡ってGRFと言う組織とEUSTと言う組織が争いを繰り返しているのです。

つまり霊夢達が転移した時代は西暦2100年以降、となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802x/>

普通の現代人が幻想入り

2011年12月1日22時58分発行